DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の方
購入・閲覧禁止
寝取られマスター
～担当アイドルが催眠で壊される～
Presented
by 530

STEP1：処女喪失
担当アイドルが催眠にかけられ、
芸能界に巣くう変態どもに
処女を奪われてしまう…

STEP2：調教
楽屋で…ホテルで…深夜の公園で…
ときにはプロデューサーの目の前で…
度重なる調教に
彼女たちは身も心も
堕ちていく…♥

STEP3
8 出産
そして十か月後――
無責任に孕まされた二人と
童貞のプロデューサーが迎える結末は……

はっ♥はっ♥はっ♥はあっ♥はあっ♥
ひっひっひ♥どうだ文香？今までとは比べものにならんほど気持ちいいだろ♥
はいっ♥あっ♥はいいっ♥♥
そうだろそうだろ♥女はみ～んなこの薬が大好きだからな♥アイドルだって例外じゃないぞ♥
イイっ♥あっ♥イグッ♥♥♥何度もイッてるのに腰止まらないひいっつ♥♥♥♥
この薬のためだけに生きてるアイドルも何人もいるからなぁ…♥
バチュッ
ブチュッ
「はっ♥はっ♥はっ♥はあっ♥はあっ♥」
「ひっひっひ♥どうだ文香？今までとは比べものにならんほど気持ちいいだろ♥」
「はいっ♥あっ♥はいいっ♥♥」
「そうだろそうだろ♥女はみ～んなこの薬が大好きだからな♥アイドルだって例外じゃないぞ♥」
「イイっ♥あっ♥イグッ♥♥♥何度もイッてるのに腰止まらないひいっつ♥♥♥♥」
「この薬のためだけに生きてるアイドルも何人もいるからなぁ…♥」
基本CG29枚＋カットイン（立ち絵含む）
SS版・吹き出し版・書き文字のみ版・文字なし版の4パターンを収録

「ドラマのお仕事……ですか？
私が…」
「ああ、インターネット配信
の番組らしいんだが……」
「文香のステージを見た
監督から出演してほしいと
事務所にオファーがきたんだ」
「はあ…ドラマということは
演技…ですよね？
私に務まるでしょうか…」
「そのあたりは問題ないはずだ
文香の素のキャラクターが
欲しいって聞いてるからな」
「……ただ――」
「ただ…？」

「いや、向こうの意向としては軽いキスシーンなんかを入れたいらしいんだ…もちろん振りだけにする、とは聞いてるんだが…」

「……」

「実際に俳優と向き合うのは文香だ現場の勢いや事故で万が一…という可能性はゼロじゃない」

「文香が少しでも嫌なら断ろう。本人の意思を無視して断るわけにもいかないから話したが…俺としてはむしろ…」

「プロデューサーさん…」

「アイドルとしてのイメージもあるし…いやしかし…」

「プロデューサーさん少し屈んでもらえますか？」

ちゅっ
「ふ、文香……!?」

「文香、な、な、なにを…」

「これで…たとえ万が一、が起きてしまっても大丈夫です。私のファーストキスはプロデューサーさんにあげてしまいましたから…」

「……！　文香…」

「私…やります。せっかくいただいたお仕事…頑張ってみます」

「本当に…いいのか？」

「はい。貴方に出会えて私は少しだけ変われました……勇気を出して、もっと前に進みたいんです」

「プロデューサーさんと一緒に次のページに……知らない世界に」

「文香……
……ああ、そうだな。安心しろ…！文香のことは俺が――」

「え？」
ばちゅうう
催眠使用者
：権田金造（仮名）
催眠対象
：鷲○文香および関係者
催眠内容
：権田は監督兼主演男優
：監督の指示は絶対

「んん～ぎこちないの～
キスは初めてか？」
「ひえ…♥ファーストキスは
プロデューサーさんの…頬に…」
（文香は俺が守…え？？）
「ははぁ、そんなのはキスの
内に入らんよ（笑）
お前のファーストキスの
相手はワシだ♥わかったな」
「は♥はひ…ん♥
んちゅ♥ちゅぱっ♥」
ちゅぱちゅぱ
もみ
もみ

「んんん…」
ちゅるぅ
もみ
もみ

「んぷっ♥♥」
ぶちゅっ
もみ
もみ

「ほらもっと舌を絡ませなさい愛し合う二人の濃厚なキスシーンだぞ❤」

ぬろ
ぬろ
ひちゃ
ひちゃ

ひちゅ
ちゅっ
ちゅっん
ばじゅっ
ちゅ
ばるっ

ちゅべ
ちゅばろ
ばろべちゅ
ばるお

もみ
もみ

「は…はひっ❤」

「そうそう上手だぞぉ…下品な音を部屋中に響かせるんだ❤ワシのことを心の底から慕う気持ちを忘れるな」

「よぉ～しよし❤ワシも愛してるぞぉ文香…❤」

「ぷあ…っ♥♥」

「よぉしキスシーンは
これくらいでいいだろう♥
なぁプロデューサーくん
よく撮れてるだろう？」

「ああ、それから
急遽ラブシーンも追加する
ことになったんだが
別に構わないな？」

「は、はい…
もちろん……??」

（あれ…？
俺は何を言って…？
そんなのダメに…
何かが…おかしい…？）

「そう怪訝な顔をするな
文香が嫌がってるように
見えるか？なぁ文香♥」

「は…はい…♥
問題…ありません…♥」

「く……」

「なんだ衣装の心配か？
衣装ならこのまま
私服で構わんよ（笑）
どうせすぐ
脱がすんだ…♥」

はぁはぁ

ぬとぬと

もみ

もみ

「はい…い、いや…あの…
キスシーンは振りだけの
はずじゃ…」

「すまんすまん
つい勢いが乗ってしまってな（笑）
しかしキスシーンがあることは
伝えてあっただろ？
それくらいは現場の雰囲気で
変わっていくものだよ」

「あ…っ♥」
「よしよし、指定通りちゃ～んと下着は脱いできたか――
おお、これはこれは…♥ 儂の目に狂いはなかったなぁ♥」
「……!!」
「は…はい…すみません…♥」
「文香ぁ…駄目じゃないか。せっかく豊満に育った身体をこんなゆったりした服で隠しちゃあ…♥」
「これからはもっと身体のラインが出る服を着るんだぞ？ カリスマギャルみたいな下品なやつを儂が見繕ってやるからな♥」
ガバッ
たゆっ
たゆん

「あうっ♥」
「なんだコレは♥手に収まりきらんじゃないか♥この極上ボディに手をつけずにいるとは…周りの男はボンクラばかりだな(笑)」
「ん♥ふぅ…♥うぅ…♥♥」
「感度も良好…と♥今まで何人ものアイドルと共演してきたがその中でも最上級品だぞ♥」
なあプロデューサー?キミもこの身体に惚れこんで文香をスカウトしたんだろ?」
「いいや、私は…」
「ああ、よいよい(笑)それよりも撮影チェックの方しっかり頼むよ」
もみ
もみ
もみ
ムギュ
「そろそろ前戯は終わりにして本番に入るからな♥」

「ひ…っ
ぷ、プロデューサーさん…っ」
「送っておいた
エロタイツも履いて
きたか。
偉いぞ文香ぁ❤
しっかり催眠が効いてるな
さて、それじゃあ
早速…」
「ま、待って
ください…!!」
「――――!!」
(い、いくらなんでも
これは…っ!
ドラマの撮影だからって…
いや…そもそも本当に
ドラマ撮影なのか…?
こんなベッドしかない
空き家みたいなところで…
スタッフもいないし
おかしいんじゃ…ないか…!?)
くちゅ
「ん~? 何かね
プロデューサーくん」

「ドラマ撮影でここまでするなんて認められません…っ!!そもそも本当に――」

「処女くらい捨てられんで女優が務まるか。……なあ文香？　お前は覚悟できてるよな？」

「うぅ…は…あ…
……は、い……♥」

「何を言っておる…ドラマのラブシーンでリアリティを出すため実際にセックスをするなんて当たり前の話だろ？

ドラマ撮影以外でこんなことをしたらただのレイプになってしまうじゃないか(笑)儂がそんなことするわけあるまい？」

「そ…う…??
そ、それは…そうですが…しかし文香は……っ!!」

「ほれ聞いたか？覚悟ができていないのはキミだけだよプロデューサー(笑)」

くちゅ

「それじゃあ文香、次のシーンの台詞を言ってみようか。もちろん笑顔でな♥」

「あ、あの…私…文香の…19年間守ってきた、しょ、処女…を♥」

「文香の処女ま○こも美味しくいただいてやるぞ♥」

「おじさまのおち○ぽで思いっきり貫いてっ♥文香をおじさまの女にしてくださいっ♥」

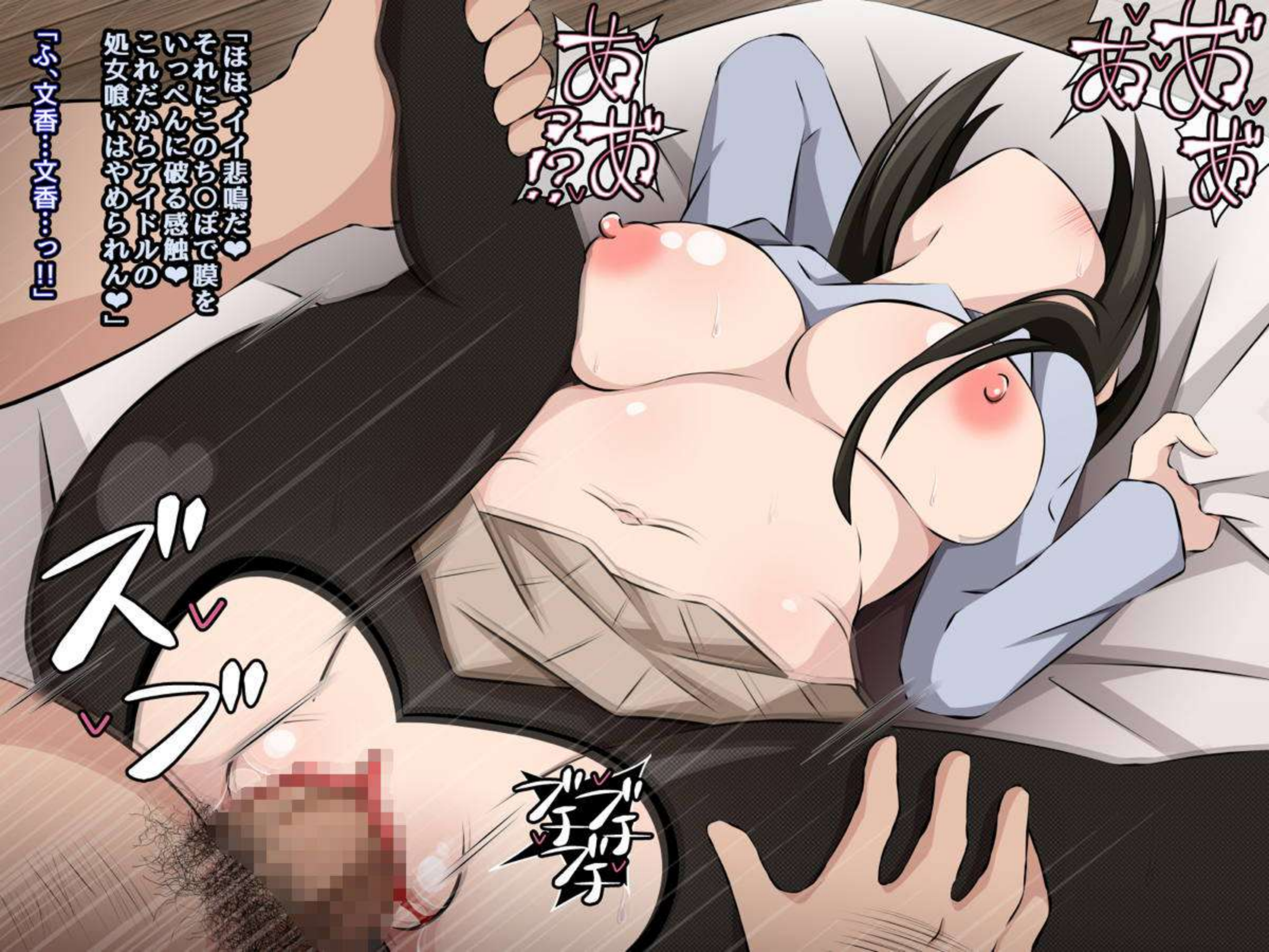
「ふ、文香…っ!!」

「よしよし♥よく言えたなぁ…♥なあに任せておけ。こう見えて儂は百人以上のアイドルをこのち○ぽで女にしてやってきたからな…♥」

「それいくぞ～3・2・1―!!」

くちゅ

「あ―!」


「ほほ、イイ悲鳴だ❤
それにこのち○ぽで膜を
いっぺんに破る感触❤
これだからアイドルの
処女喰いはやめられん❤」
「ふ、文香…文香…っ!!」
ぁぁぁ
ぁぁっ!?
ズブ
ブチブチ

びくっ
ビクッ
「二人が気の済むまでひたすらに何度も愛し合うシーン…❤これがドラマのメインだろ❤」
「な――」
「まあそれは儂と文香に任せて❤」
「ひひひ❤痛いかぁ文香？一生に一度の痛みだからな…しっかり味わうんだぞ❤」
「も、もういいだろ…っ早くソレを抜いて――」
「何を言っておる、本番はここからじゃないか❤」
ニヤ
「プロデューサーくんはそこで映像チェックでもしながらのんびり待っていてくれ(笑)」

●REC

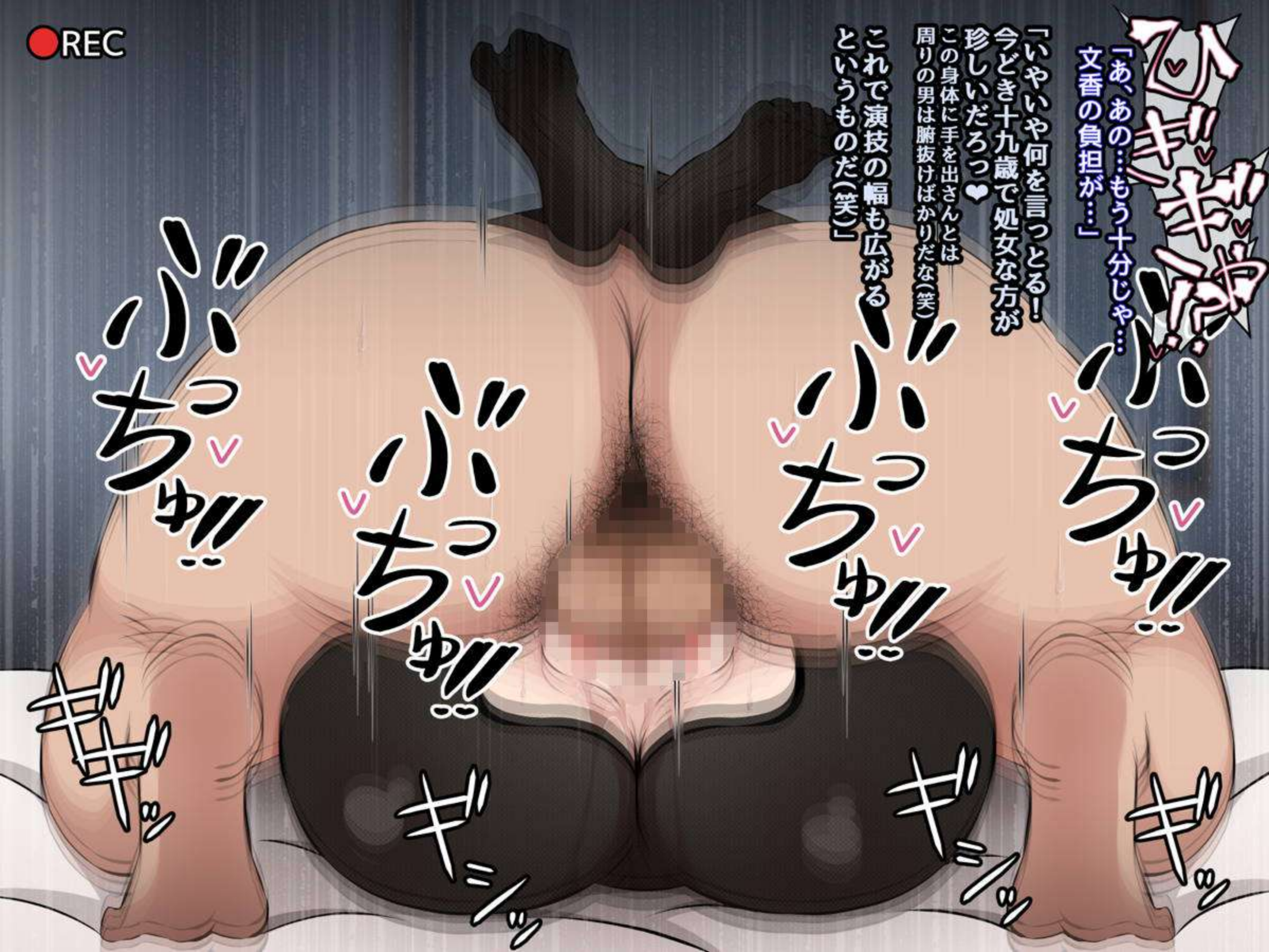
「ふん❤ふんっ❤ふんっ❤ふんんうっ❤」

おっ

ぶっ

ぶっ

ぶ

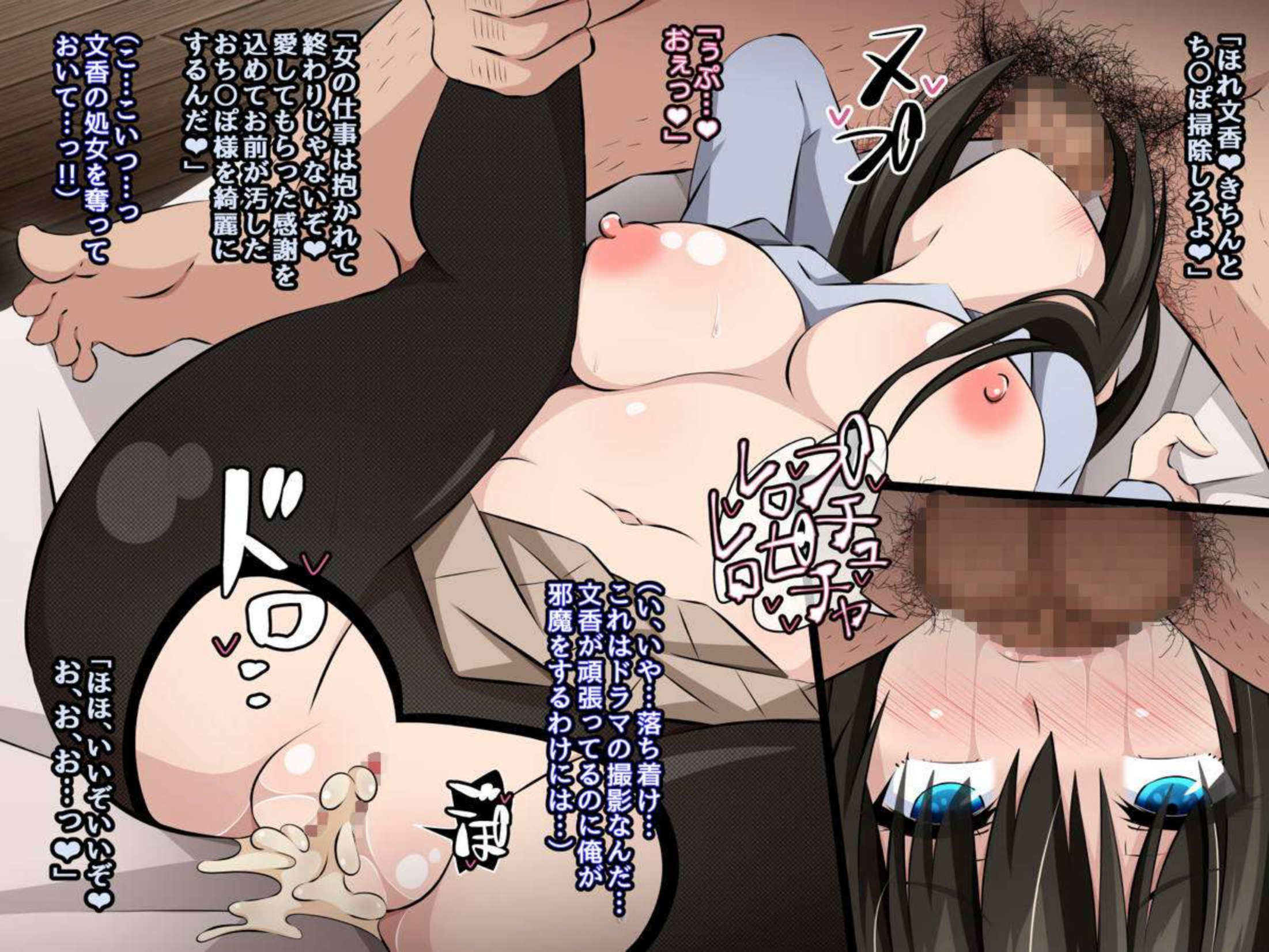

●REC
ビクッ
ギッ
ギッ
「あ、あの…もう十分じゃ…文香の負担が…」
「いやいや何を言っとる！今どき十九歳で処女な方が珍しいだろっ❤この身体に手を出さんとは周りの男は腑抜けばかりだな(笑)これで演技の幅も広がるというものだ(笑)」
ぶっちゅ!!
ぶっちゅ!!
ぶっちゅ!!
ぶっちゅ!!
ギッ
ギッ
ギッ
ギッ

REC
「あ、あの…もう十分じゃ…文香の負担が…」
「いやいや何を言っとる！今どき十九歳で処女な方が珍しいだろっ❤
この身体に手を出さんとは周りの男は腑抜けばかりだな(笑)
これで演技の幅も広がるというものだ(笑)」
「その証拠にほれ❤見てみなさいこの顔❤キミは今まで文香のこんな表情見たことあるかね？」
「い、いえ…」
ひギギギャ
ぶっちゅ!!
ぶっちゅ!!
ぶっちゅ!!
ちゅるずるぅ
んふ
ふ
「そうだろうっこれがキミでは引き出せなかった文香の新たな一面だっ❤」
「安心しろっキミが見つけてきた未熟なアイドルは儂が立派な女に成長させてやるから(笑)」
「……っ」
「ひひひっ❤まずはその第一歩としてっ初めての膣内射精を——」
「な…！やめ——」
「ひひっ❤射精るぞっ❤」
ギッ
ギシ
ギッ

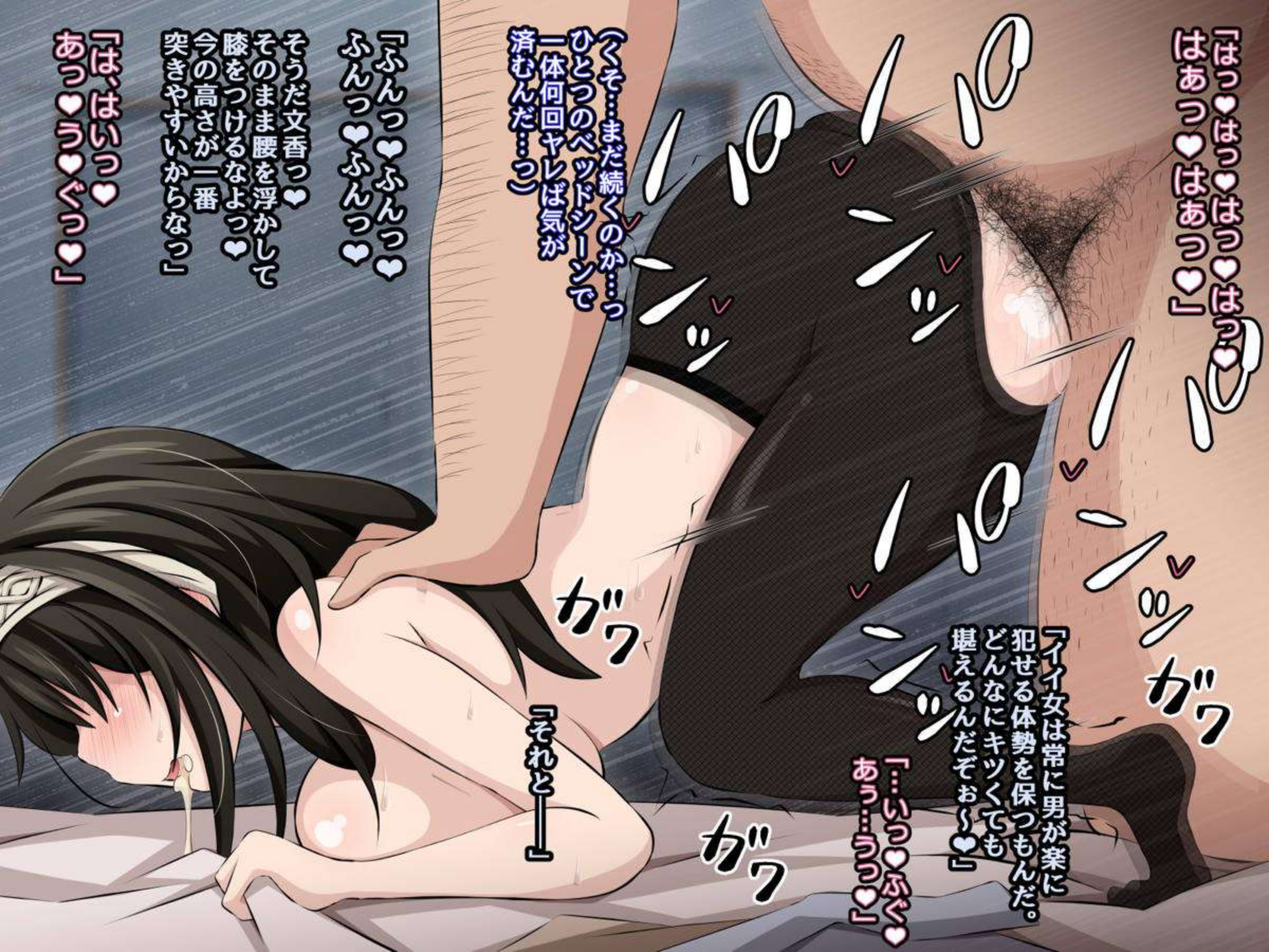
●REC
「あ――」
「ほっ❤ほほぉっ❤射精る…っ❤射精るぅ…っ❤」
「初めてのくせに搾り取ってきおる❤貪欲な未成年ま○こめ…っ❤」
「儂の子種を受け入れたアイドルは大成すると評判なんだぞ❤」
「よかったなあ文香❤プロデューサーくん❤」
『……』

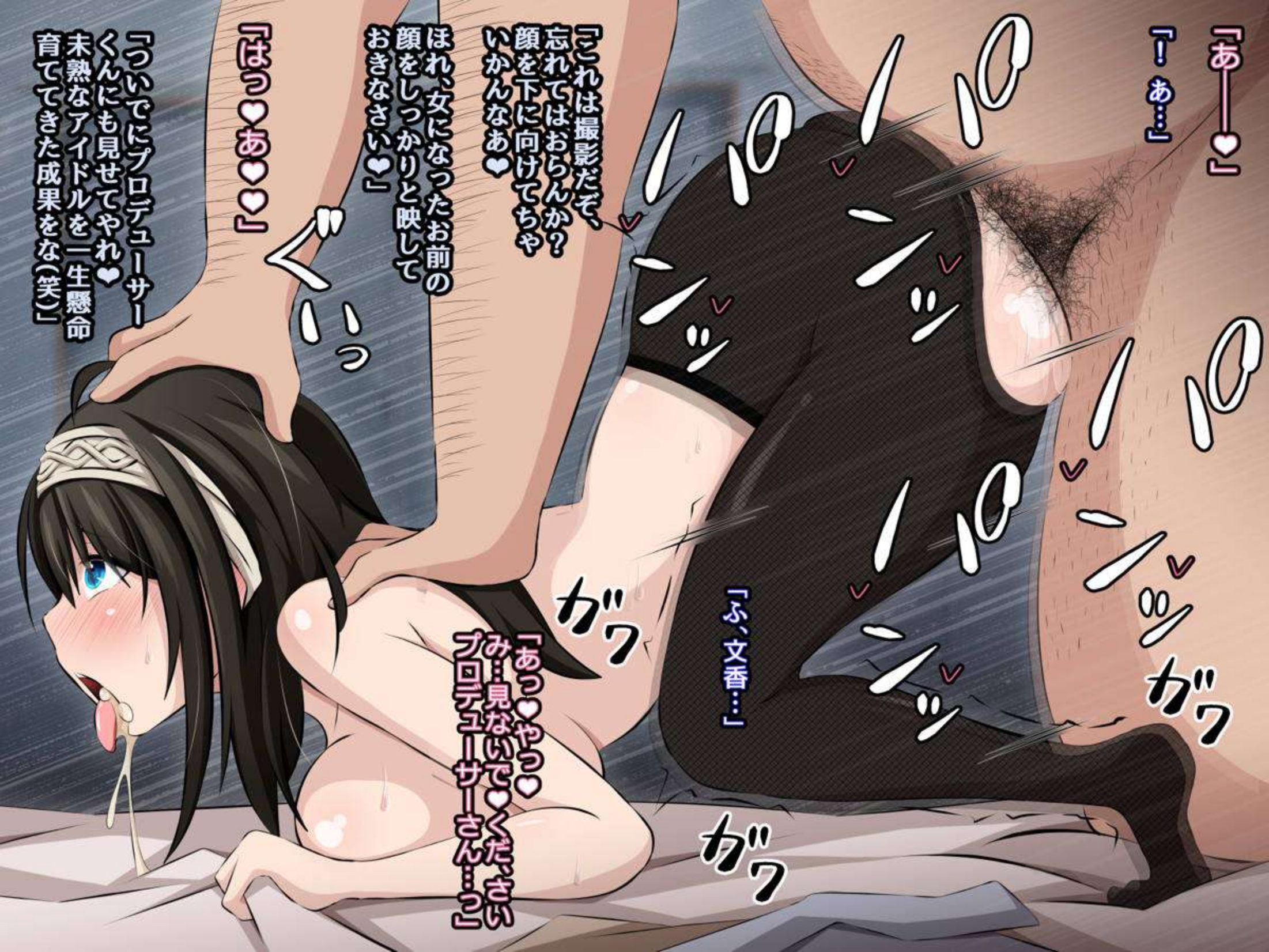
●REC
ちゅぱ
「これこれっ❤そんなに吸いついたら抜けないだろ(笑)」
「名残惜しいのはわかるがそれでは次のシーンにイケないではないか❤」
ぶぶぶぶぶぶっ
ぢゅぢゅぢゅっ
ぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅ
ひっ
ぢゅっ
「……え？次のシーン……？」
「当たり前だろ？儂と文香の愛を確かめ合うラブシーンが一回のセックスで終わるわけあるまい❤」

えっ!
メリ
「い、いえ…私は…その、経験がないもので…」
「なんだ、君は童貞だったか。道理で頼りないわけだ(笑)そんなことだから担当アイドルが喰われるんだよ(笑)」
「まあそういうことならこれから文香のことは儂に任せてくれたまえ❤」
「おお~こりゃあたくさん射精たなぁ❤優秀優秀…儂の射精量でアイドルとしてのランクが決まるからな(笑)儂は使ったま◎こから自分の精液が溢れるのを見るのが好きでのお❤プロデューサーくん、キミも男ならわかるだろ?」
ドロ
ぼ
「文香ほどの女は君には荷が重いだろう(笑)」
「……」


「ほれ文香❤きちんとち○ぽ掃除しろよ❤」
ズブ
「うぷ…❤おえっ❤」
ペロペロ
チュパチュパ
(い、いや…落ち着け…これはドラマの撮影なんだ…文香が頑張ってるのに俺が邪魔をするわけには…)
「女の仕事は抱かれて終わりじゃないぞ❤愛してもらった感謝を込めてお前が汚したお○ぽ様を綺麗にするんだ❤」
(こ…こいつ…っ文香の処女を奪っておいて…っ!!)
ドロ
ぼ
「ほほ、いいぞいいぞ❤お、お、お…っ❤」

「ふおっ❤」
ブゼッ
えっ!?
（何を勝手な…っ）
ブボ
「よ❤よぉ～しよし❤合格だ❤ディープキスの応用がしっかりできておる❤性処理道具（アイドル）としての自覚が出てきたか？自分の口が歌うためにあるんじゃないとわかったようだな」
「しかしヤリ過ぎだ（笑）あまりに張り切って舐め回すものだから少し射精してしまったではないか❤」
ドロ
ぼ
「次のシーンでまたお前の膣内に射精する分がな❤ほらその邪魔くさい服は脱げ」


「はっ♥はっ♥はっ♥はあっ♥はあっ♥」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
ガク
ガク
ガク
「イイ女は常に男が楽に犯せる体勢を保つもんだ。どんなにキツくても堪えるんだぞぉ～♥」
「…いっ♥ふぐ♥あう…うっ♥」
（くそ…まだ続くのか…っ ひとつのベッドシーンで一体何回ヤレば気が済むんだ…っ）
「ふんっ♥ふんっ♥ふんっ♥ふんっ♥」
そうだ文香っ♥そのまま腰を浮かして膝をつけるなよっ♥今の高さが一番突きやすいからなっ」
「は、はいっ♥あっ♥う♥ぐっ♥」
「それと――」


「あ―♥」
「！あ…」
「これは撮影だぞ、忘れてはおらんか？顔を下に向けてちゃいかんなあ♥
ほれ、女になったお前の顔をしっかりと映しておきなさい♥」
「はっ♥あ♥♥」
「ついでにプロデューサーくんにも見せてやれ♥未熟なアイドルを一生懸命育ててきた成果をな(笑)」
「ふ、文香…」
「あっ♥やっ♥み…見ないで♥ください プロデューサーさん…っ」
ガク
ガク
ガク

ばひっ!?
い!!
ブゆゼッ
ゼュ〜ッ
ブゼュッ
ゼチュウ
ヘッ
「ふほっ❤」
「文香ーーっ」

「は――っ♥
は――っ♥」
「ふむ、まあ今日は
こんなものか……♥
頑張ったな文香」
「……はっ……はい……♥」
もみ
どろお…
「いやいや、今日のことだけじゃないよ。
こんなに美味しい果実(アイドル)を儂のために育ててくれて本当に感謝しているよ(笑)」
(なにを……っ
文香はお前のために…
こんなことのために
アイドルになった
わけじゃ――)
「プロデューサーくんも
長い時間ご苦労だったね」
「い、いえ…仕事…
ですから…」
もみ
「それで次の撮影日
だが――」
「え――!?」

「は――っ♥
は――っ♥」

「ふむ、まあ今日は
こんなものか…♥
頑張ったな文香」

「……は…はい…♥」

もみ

どろぉ…

「いやいや、今日のことだけじゃないよ。
こんなに美味しい果実(アイドル)を儂のために育ててくれて本当に感謝しているよ(笑)」

(なにを……っ
文香はお前のために…
こんなことのために
アイドルになったわけじゃ――)

「プロデューサーくんも
長い時間ご苦労だったね」

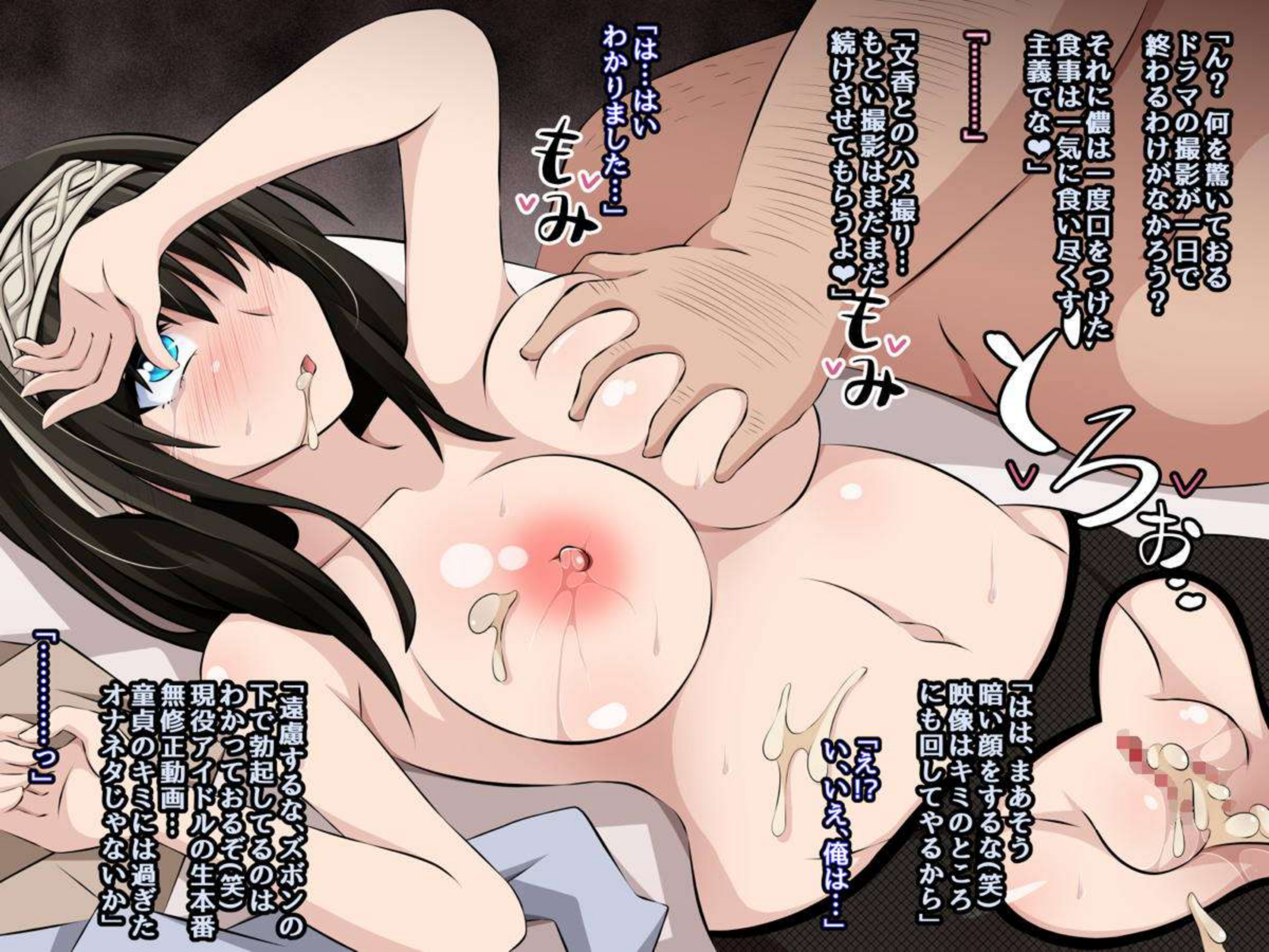
「い、いえ…仕事…
ですから…」

もみ

「それで次の撮影日
だが――」

「え――!?」

「は――っ♥ は――っ♥」
「ふむ、まあ今日はこんなものか……♥ 頑張ったな文香」
「……は……はい……♥」
もみ
どろお…
「いやいや、今日のことだけじゃないよ。こんなに美味しい果実(アイドル)を儂のために育ててくれて本当に感謝しているよ(笑)」
(なにを……っ 文香はお前のためにこんなことのためにアイドルになったわけじゃ――)
「プロデューサーくんも長い時間ご苦労だったね」
「い、いえ…仕事…ですから…」
もみ
「それで次の撮影日だが――」
「え――!?」


「ん？ 何を驚いておるドラマの撮影が一日で終わるわけがなかろう？
それに儂は一度口をつけた食事は一気に食い尽くす主義でな♥」
『……』
「文香とのハメ撮り…もとい撮影はまだまだ続けさせてもらうよ♥」
もみ
「は…はい わかりました…」
もみ
とろお…
「ははは、まあそう暗い顔をするな(笑)映像はキミのところにも回してやるから」
「え!? い、いえ、俺は…」
「遠慮するな、ズボンの下で勃起してるのはわかっておるぞ(笑)現役アイドルの生本番無修正動画…童貞のキミには過ぎたオナネタじゃないか」
『……っ』

「ほれ文香、見てみろ…大好きなプロデューサーさん…お前のセックスで勃起してくれてるぞ❤」

「え……？」

「まあ大きく見積もって儂の半分といったところか(笑)アレじゃあ文香はもうしれないな❤」

もみ

どろお…

「な、何を…俺と文香はそんな関係じゃ…」

「……」

もみ

「冗談だ、冗談。プロデューサーが担当アイドルに手を出すのは絶対あってはならんことだからな(笑)アイドルを食えるのは権力者の特権だ❤」

「ああ、それから…次からはキミは来なくていいぞ。見せつけプレイがしたいときは改めて呼ぶから(笑)文香の指導は儂に任せておけ❤」

「は、はい。よろしく…お願いします…」

「ほれ文香、見てみろ…大好きなプロデューサーさん…お前のセックスで勃起してくれてるぞ♥」
「え……？」
「まあ大きく見積もって儂の半分といったところか(笑)アレじゃあ文香はもう満足できないかもしれないな♥」
もみ
どろお…
「冗談だ、冗談。プロデューサーが担当アイドルに手を出すのは絶対あってはならんことだからな(笑)アイドルを食えるのは権力者の特権だ♥」
「な、何を…俺と文香はそんな関係じゃ…」
「……」もみ
「ああ、それから…次からはキミは来なくていいぞ。見せつけプレイがしたいときは改めて呼ぶから(笑)文香の指導は儂に任せておけ♥」
「は、はい。よろしく…お願いします…」

「ほれ文香、見てみろ…大好きなプロデューサーさん…お前のセックスで勃起してくれてるぞ♥」
「え……？」
「まあ大きく見積もって儂の半分といったところか(笑)アレじゃあ文香はもう満足できないかもしれないな♥」
もみ
どろっ
お…
「冗談だ、冗談。プロデューサーが担当アイドルに手を出すのは絶対あってはならんことだからな(笑)アイドルを食えるのは権力者の特権だ♥」
「な、何を…俺と文香はそんな関係じゃ…」
「……」
もみ
「ああ、それから…次からはキミは来なくていいぞ。見せつけプレイがしたいときは改めて呼ぶから(笑)文香の指導は儂に任せておけ♥」
「は、はい。よろしく…お願いします…」

一週間後――
「ちゅ♥ちゅう～～っ♥」
「よしよし、そうだ♥パイズリのときは尿道に吸いついて精子をおねだり♥きちんと覚えられたな…♥それから次はどうする？」
「んぢゅっ♥」
ちゅぱ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ

一週間後――

「ちゅ♥ちゅう～～っ♥」

「よしよし、そうだ♥パイズリのときは尿道に吸いついて精子をおねだり♥きちんと覚えられたな…♥それから次はどうする？」

「んぢゅっ♥」

ひぬぢ ちゃろぉ ひぬ ちゃろ

ぬっちゃ

ぬっちゃ

ぬっちゃ

ぬっちゃ

ぬっちゃ

ひぬ ちゃ

「おほ♥舌の裏で亀頭舐めときたか♥いいぞぉ♥ぬろっぬろの感触がたまらん…♥よおし合格点をやろう♥」

「あはぁ♥ありがとうございますぅ♥れろ♥れろれろぉ♥」

「これでパイズリもマスターしたな♥またプロデューサーに報告してやろうか(笑)動画を心待ちにしてるだろ」

「ところでこの水着だがプロデューサーに見せたことはあるのか？」
「いえ、ありません♥ちゅ♥お仕事もあるから海に行こうと言われていたのですが…そのお仕事はキャンセルになってしまったので…」
「そうかそうか、それは残念だったな～（棒）」
（まあその仕事をバラしたのは儂なんだが（笑））
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ

着信中…
応答
拒否
ルルル…
「む、着信か…誰だ、こんな昼間から…ああ、文香はそのまま続けていなさい♥」
「はい、わかりました♥」
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ

「む、着信か…
誰だ、こんな昼間から…
ああ、文香はそのまま
続けていなさい♥」

「はい、わかりました♥」

「仕方のないやつだ…
わかった、手配してやる。
今度は誰がいいんだ？

……なに、高○楓？
ああ、知っとるよ。
……はは、安心しろ、
儂は十代専門だからな」

「もしもし？
ああ、お前か…どうした？

……ああ

……なに？

……前のは
またか……
どうした？
もう壊したのか？」

「んちゅ♥ちゅっ♥」

「任せておけ。
じゃあいつもの方法で――
――うっ♥」

ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ
ぬっちゃ

「うっ♥ふぅ〜〜♥」
「あぁいや、大丈夫だこっちの…ああそうだ、この前ようやく手に入れてな♥そういうわけだから邪魔をしてくれるな？
ちゅぱっ
ちゅぱっ
あぁわかってるよ、一週間以内には手配してやる。またこっちから連絡するからせいぜい溜めておけ(笑)
……ああ、またな」
ぜぶぶぶ
ぜぶぶぶ
ぜぶぶぶ
ぜぶぶぶ

「ふぅ…まったく…」
「おお❤お口あ～んの作法もよくできたな❤またたくさん射精たな❤」
あぁ～ん
ぬとぉ
「ありあとぉ…ごらいまふ❤はの…ひまの…❤」
「ああ、儂の甥っ子でな。可愛がっているんだがいつまでも甘えん坊で困ったものだよ。女の世話まで未だに儂がしてやらんと…
……ん？そういえば高○楓も確かお前のプロデューサーが担当だったか？……ひひ、こりゃ面白いことになりそうだ」
「??」
「いや、こっちの話だ。文香は儂の言いなりになることだけを考えていなさい❤それがお前のためなんだからな❤
さしあたり…そうだな今日はソレを飲み込まずに一日過ごしなさい❤仕事中もず～っとだぞ？
それが今日の課題だ❤」
「はひぃ❤わかりまひたぁおじさまぁ❤」

「プロデューサー…
プロデューサー？」

「……」

「プロデューサー！」

「え？
ああ…ごめん楓さん
どうかした？」

「どうかしたんですか、
スマホを見たまま
ぼ～っとしてしまって」

「もしかして
お疲れですか？
ガマンは身体によく
ありませんよ？」

「いや大丈夫、
何でもないよ。
ただ文香のことで
ちょっと…」

「文香さんの……？
あ、さてはプロデューサー
寂しんでしょう。
彼女、最近『特別レッスン』
にかかりきりだから」

「い、いや、寂しいとか
じゃなくて……」

「私は嬉しいですけどね、
プロデューサーを
独り占めできて♥
……ふふ、どうです？
このあと軽くお酒でも…」

「そうしたいんだけど…
まだ仕事が残ってるので。
文香のレッスン記録にも
目を通さなきゃいけないし…」

「最近そればっかり
じゃないですか～
久しぶりに一緒に行き
ましょうよ～
私待ってますよ？」

「いや遅くなりそう
だから…
楽しみはまたの機会
に取っておくよ」

「え～」

「そうだ、それより今度の懇親会だけど…」

「え？……ああ、はい制作会社の関係者さんと…でしたっけ？」

「うん、ぜひ楓さんもって言われてるんだけどどうかな？今度出る番組の会社だし…」

「……ええ、いいですよ。プロデューサーも一緒ですよね？」

「もちろん」

「それなら安心です。もし私が酔い潰れちゃってもプロデューサーが介抱……してくれますよね？」

「うん、心配することないよ。変なことにはならないだろうし…もし万が一楓さんが酔いつぶれちゃっても俺がちゃんと――」

『あれ？』
催眠使用者
：権田金造（仮名）
：権田精二（仮名）に権利譲渡済
催眠対象
：高〇楓および関係者
催眠内容
：懇親会ではアイドルへのお触りＯＫ
：アイドルは勧められたお酒を断れない
：酔い潰れたアイドルはお持ち帰りＯＫ

「楓さ～ん身体細いね～♥
さすが元モデルさん♥」
「は、はぁ…」
もみ
もみ
「でもちゃんとご飯食べないとダメだよ～
僕もうちょっと肉付きイイ方が好みだし～♥」
「……ッ」
（コイツ…いくら懇親会ではお触りOKだからって初対面の楓さんに馴れ馴れしく…それに制作会社の関係者って聞いてたのに…コイツまだ学生じゃないのか……？）

『!』
「はい、楓さん
遠慮しないでどんどん飲んで♥
楓さんお酒好きでしょ？」
ぽい
もみ
もみ

『!』
「はい、楓さん
遠慮しないでどんどん飲んで❤
楓さんお酒好きでしょ?」
「え……で、でも……いま
お酒に何か……」
「ちょ、ちょっと
あんた……」
「あ~ダメダメ、アイドルは
お酒断れないの知ってるでしょ?
大丈夫大丈夫、ちょっと
睡眠薬とドラッグを混ぜた
お薬溶かしただけだから❤」
「ぐ…っ」
「……は、はい
いただきます……」
もみ
もみ
ジュアアアア

『！』
「はい、楓さん遠慮しないでどんどん飲んで❤楓さんお酒好きでしょ？」
「え……で、でも……いまお酒に何か……」
「ちょ、ちょっとあんた……」
「あ～ダメダメ、アイドルはお酒断れないの知ってるでしょ？大丈夫大丈夫、ちょっと睡眠薬とドラッグを混ぜたお薬溶かしただけだから❤」
「ぐ…っ」
「……は、はいいただきます……」
ゴク
ゴク
「んく…っ❤」
「お❤いい呑みっぷりだね～❤さすが楓さん❤」
「ほ～れいっき❤いっき❤」
「ん…っ❤んく❤く…っ❤」
（か、楓さん…っくそ…決まりとはいえあんな酒を飲まなきゃならないなんて……）

はぁ…あつ??

ズキズキ

「じゃあまだ始まったばっかりだけど懇親会はもうお開きにしようか。楓さんは僕が責任もって連れて帰るね❤」

「あれれ〜？たった一杯で潰れちゃった？お酒弱いんだね〜楓さん(笑)」

「……ッ」

「はは、もうふらふら❤これじゃあ一人じゃ帰れないしお持ち帰りされても仕方ないね❤ね？プロデューサーさん」

「い、いや…しかし…それなら俺が――」

「い、いや…っ」

「遠慮しないで〜プロデューサーがアイドルをお持ち帰りなんてマズいでしょ？大丈夫大丈夫変なコトしたりしないし後でちゃんと連絡もするからさ❤」

「あぅ❤やぁ…❤ぷ…❤ぷろぉりゅ…さぁ…❤」

一時間後――

「楓さん大丈夫かな…
後で連絡するとか
言ってたけど――」

一時間後――

「楓さん大丈夫かな…
後で連絡するとか
言ってたけど――」

「！ きた…
……え？
ビデオ通話…？」

プルル…

一時間後――

「楓さん大丈夫かな…
後で連絡するとか
言ってたけど――」

「！　きた…
……え？
ビデオ通話…？」

「……
もしもし――」

ガチャ

『おほっ♥綺麗なま◎こ♥お薬でとろっとろになってるね～♥ひひ、美味そ～♥』
『な……!?』
ぐい
『か……楓さん……っ!?』
『ところで楓さん途中で寝ちゃったから僕が運んだんだけど楓さん軽すぎない？もうちょっと食べさせて体力つけないとこれから大変だよ～』
ヌポ
トロ～…
『……あ、もしもしプロデューサー？ちゃんと映ってるかな？無事に楓さんを連れ帰れたので約束通り連絡しました～♥場所は都内のホテルで～す♥』
『ん…ふぅ…♥』
スー…スー…
『ちょっと…これはどういう…』
『…さて！それじゃあさっそく始めますか♥』

「始めるって…!!何をするつもりですか!!ヘンなことはしないって約束じゃ――」
ボロン
セット
「そ、それはそうですが…」
『じゃ本人に聞いてみる？お～い楓さ～ん？このまま○ぽ入れちゃってもいいよね～？』
『……』
『何って、こんなご馳走前にしてやることなんてひとつでしょ❤
同じ部屋に泊まる男女がセックスするのは別にヘンなことじゃないし～（笑）
それにプロデューサーだって知ってるでしょ？お持ち帰りされちゃったアイドルは何されても文句は言えないんだよ❤』
『返事しないとOKってことだよ～？いいのかな～？セックスしちゃうよ～？』
「か、楓さん――!!」
『……』

『はい時間切れ～っ♥』

ズ

ブ

ブチ
ブチ
ブチ

あっ

『あっ…』

『おっ…❤へ？あれ？ぷちぷちっと膜を破るこの感触…っ❤❤もしかして楓さん処女だった？（笑）』

みぢ…

『嘘でしょラッキー❤二十五歳だしさすがに経験くらいあるかと思ってたけど…てかプロデューサーとは一回もしてないんだ（笑）』

ごめ～んプロデューサー楓さんのバージン思いがけず頂いちゃった～❤』

ハッ!!

「ぐ……っ」

『あ、誤解しないでよ、これレイプじゃないからね～？ちゃんとヤる前に確認したし』

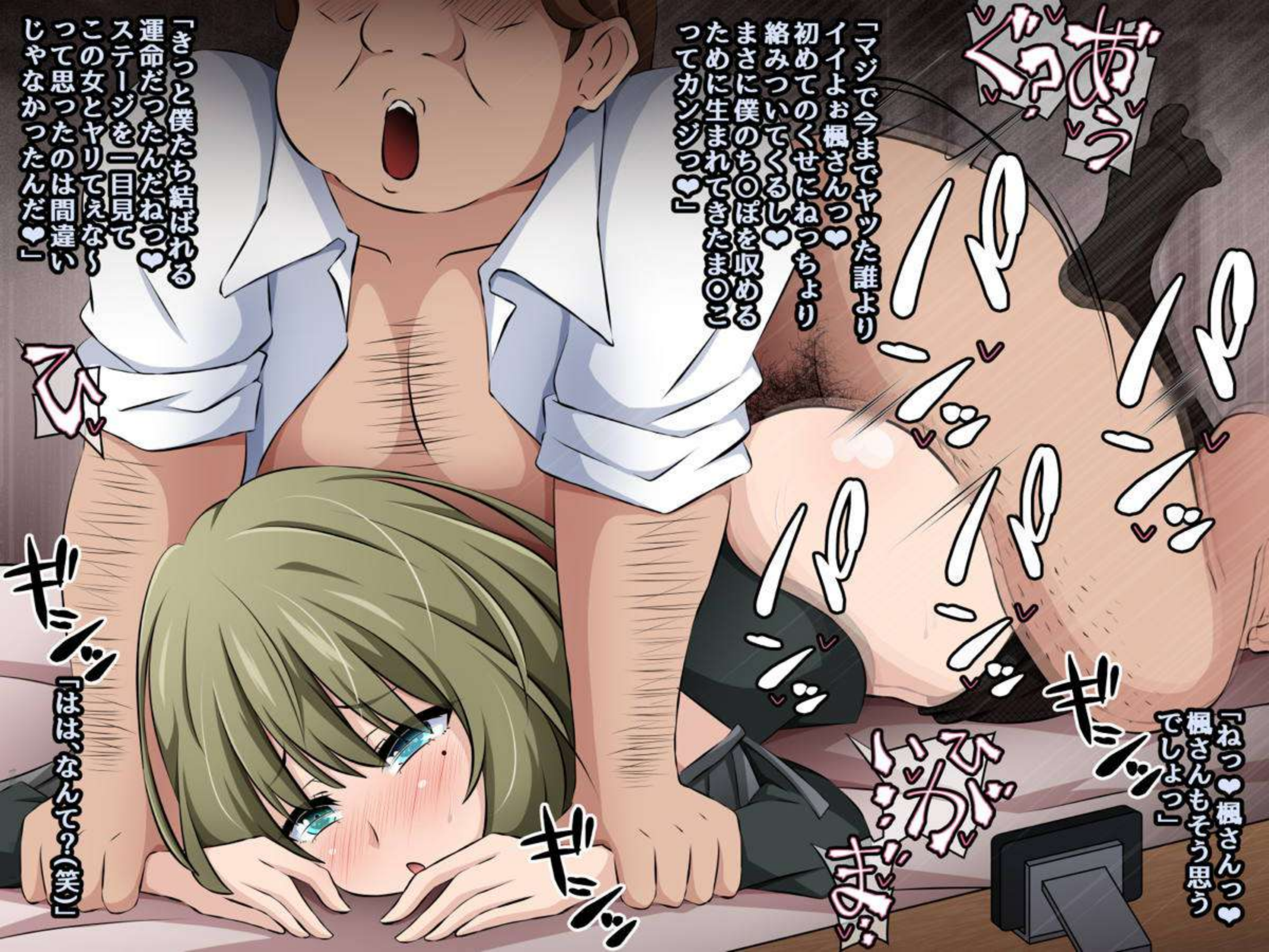
『正規の手順を踏んで担当プロデューサーにも見てもらってる完全合意の上の公認セックスなんだから❤ね～そうだよね～？プロデューサー』

「……は、はい…」

『よかった～❤じゃあ…か・え・で・さん❤プロデューサーにしっかり見てもらおうね！僕たちがい～っぱい愛し合うところ❤』

ぶる…

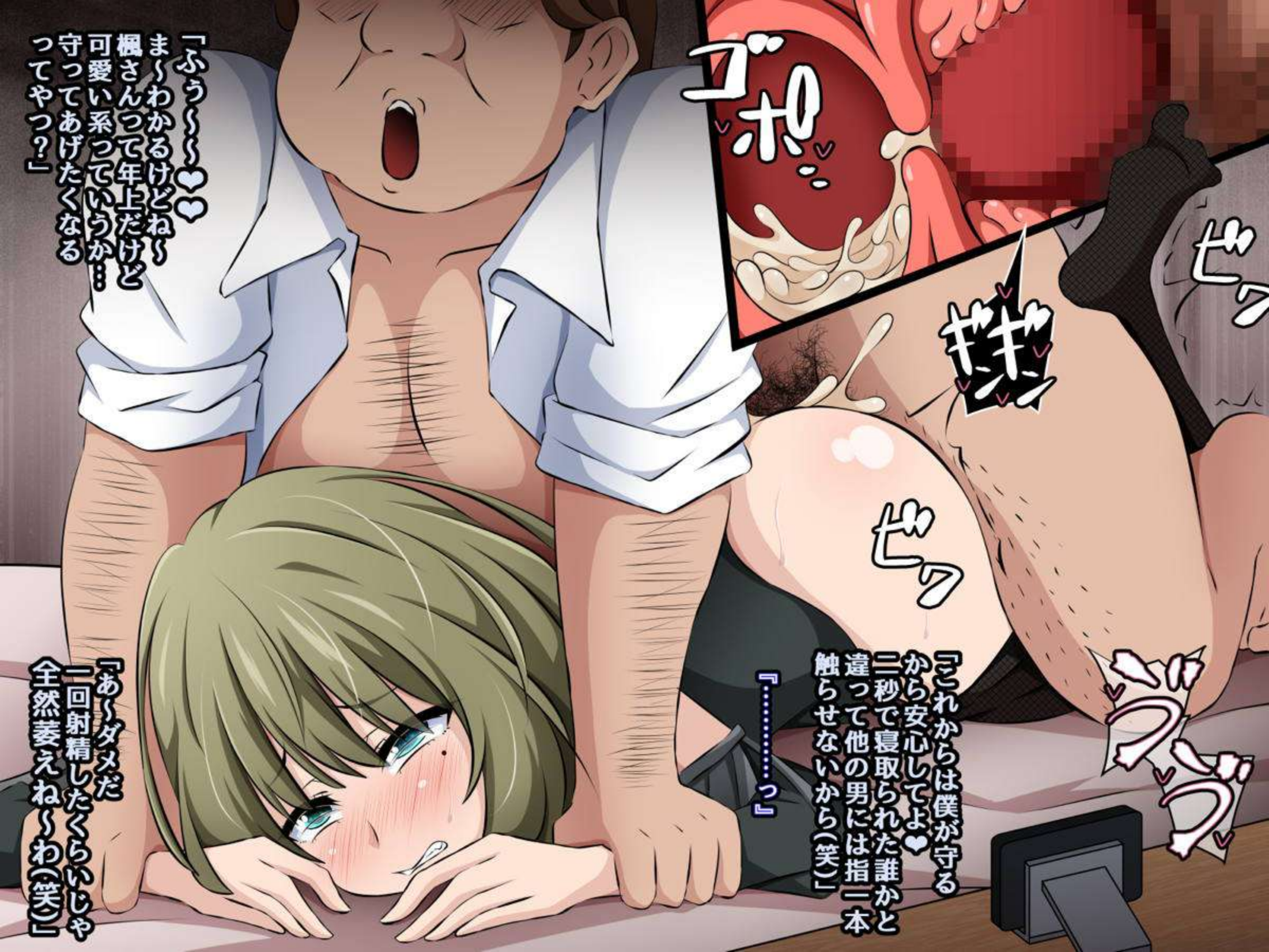
『か…楓さん…楓さん…っ!!』
「ほっ❤ほ?❤ほっ❤…ぅほっ❤ぅほほっ❤や…やばっ❤このま○こ❤」
「二十五年間温めてクスリで仕上げた処女ま○こっ❤腰抜けるくらい気持ちいィ~っ❤」
「僕のために今までとっておいてくれてありがとぉ~っ❤」
ぶっ?
ギンッ
ギンッ
ギンッ
ぉぉ?


ぐっぁぁっ
「マジで今までヤッた誰より
イイよお楓さんっ❤
初めてのくせにねっちょり
絡みついてくるし❤
まさに僕のち◎ぽを収める
ために生まれてきたま◎こ
ってカンジっ❤」
「きっと僕たち結ばれる
運命だったんだねっ❤
ステージを一目見て
この女とヤリてぇな〜
って思ったのは間違い
じゃなかったんだ❤」
ぴ
ギッ
「はは、なんて?(笑)」
ギッ
ぴがっ
いっ
ぎ
ギッ
「ねっ❤楓さんっ❤
楓さんもそう思う
でしょっ」

「…あ～やべ❤楓さんのために一週間も溜めて来たからもう射精そう❤」
「プロデュ～サ～もちろん膣内射精はOKだよね～？」
『い、いや、それはさすがに…っ』
「え～なんで～？楓さんのおま◎こは大歓迎だって言ってるよ？」
『し、しかし楓さんは…』
「本人もイイってさ❤ね～楓さん？」
「いいから『はい』って言って！」
「は～いご本人の許可いただきました～❤膣内射精しま～す❤」
『ちょ――』

『……!!』
ビク
ビク
ビク
ド
「あ❤あ❤あ❤
き❤気持ちい～❤❤
高○楓に種付けっ❤❤
最高お～❤❤」

『し…しかし…もし妊娠したりしたら…』
『へーきへーき、そう簡単には孕まないよたぶん(笑)』
ビチャ
ビチャ
ビチャ
ブチュウッウウ
ビク
ビク
あっ あっ あっ
「あ～射精る❤ビチャ まだ射精るっ❤ 年上アイドルの子宮 汚す精子止まらね～❤」
『か…楓さん…っ!!』
「だ～いじょうぶだって プロデューサーは心配性だなぁ～ 楓さんは大人なんだからさ～❤」


ゴポ
ギギ
ぜっ
ぜっ
ぶぶ
「これからは僕が守るから安心してよ❤二秒で寝取られた誰かと違って他の男には指一本触らせないから(笑)」
『……っ』
「ふう〜〜〜❤❤ま〜わかるけどね〜楓さんって年上だけど可愛い系っていうか…守ってあげたくなるってやつ?」
「あ〜ダメだ一回射精したくらいじゃ全然萎えね〜わ(笑)」

「ほらキスっ❤キスしよっ楓さんっ❤んぶちゅっ❤べろっ❤」
ぶちゅ
「ん～ダメダメ❤そんな弱～い力でイヤイヤしても勝てないよっ❤ほら舌を絡ませて～ベロベロベロお❤」
ベロベロちゅぱちゅぱ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ワワ
ブチュウウ
ギシッ
ギシッ
ヒチャ
ヒチャ
「そうそうっ❤楓さんは僕のいうコトきくしかないんだからねえ❤ひひっ❤キスもこれが初めてだったりして❤❤」

「ぶふふっ❤一生懸命子宮で吸いついちゃって❤ホントかわいいなぁっ楓さんは…決めたっ❤もう結婚するっ❤
今まで色んなアイドルで遊んできたけど楓さんは別だよっ❤こんな相性イイま○こ初めてだしっ❤楓さんもそうだよねっ」
ヒチャ
ヒチャ
チュウ
たぱ
たぱ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ブチュウ
ワワ
ギシッ
ギシッ
ガクガクおっ
「今繋がってるのはプロデューサーじゃなくて僕なんだよっ❤ほら素直になって〜っ❤」

ブチュウウ～ッ
ふぎゅっ!?
「あ～また射精るっ❤誓いの膣内射精い❤プロポーズ精子で子宮いっぱいにしちゃうよ～っ❤」
ビチャ
ビチャ
ブビュ～ッ
ビュビュドドビュビュビュビュビュッ
「僕のもんだっ❤これで楓さんは僕のもんだからな～っ❤❤」

「お♥おほ♥吸いつく～っ♥」
ほぉぉぉ
むちゅうう
ドロ
ズズ…
おぉ
「ひひひっ♥駄目だよぉ～楓さん♥名残惜しいのはわかるけどそんなに吸いつかれたらぁ…」

「もう一発射精したくなっちゃうよっ♥♥」
ブチュウッ
ぶるっぱ
ぜどぜど
ぜワ
ぜワ
ぜワ

「か、楓さん……っ」
「ぶふぅ〜っ❤
楓さんの初物ま○こ
ごちそうさま〜っ❤」
ずぱぱ
ゴポ
ドロロ〜
ズハウ
ぜワ
ぜワ
ぜワ
「最高に美味しかったよ〜
思わずプロポーズ
しちゃったもん(笑)
僕の精子を子宮で受け止めて
くれたってことは返事はOK
ってことだよね❤」
はぴ!?

「あ、プロデューサー電話まだ繋がってたんだ(笑)ちょうど良かった僕たち結婚しました〜❤ほら、楓さんもピース(笑)」
てへぺろ
「ほら❤楓さんも僕と結婚したいってさ(笑)」
「……ぐ…し、しかし…」
ゴボ
ぜワ
ぜワ
ぜワ
ドロロ〜
ズハウ
「そ、そんな勝手な…」
「何言ってるの？セックスは子作りが目的なんだからさ〜❤赤ちゃんを作る二人が結婚するのは自然なことでしょ？ね〜楓さん❤」
あへぴ

『あ～わかった、仕事の心配？』
「い、いや…」
「それしかないよね、プロデューサーと楓さんは付き合ってるわけでもないビジネス上の関係だったんだから(笑)」
「……っ」
ズハウ
ゴポ
ドロロ～
ゼワ
ゼワ
ゼワ
「仕事なら心配いらないよ、結婚してもしばらくは続けさせてあげるから。ただ僕とのデートの方が優先ってだけ❤当然だよね～？いくらアイドルでも仕事なんかより夫婦の時間の方が大切だもん❤」
『……は、はい…わ…わかりました…』
「でも先のコトはわからないなぁ～(笑)もしデキちゃったら引退するしかないかも…まあそれはおいおい考えていってよ❤それがキミの仕事でしょ(笑)」
『……』
「僕はただ自分のお嫁さんと愛を育んでいくだけだから❤」

「じゃあそういうわけで…これからよろしくね、か・え・で♥」
はぁ…
ズハウ
ゴポ
ドロロ～
ゼワ
ゼワ
ゼワ
「あ、ついでにプロデューサーもね～色々迷惑かけると思うから(笑)」

「……楓さん…」

それを最後に電話は
一方的に切られた…

なぜだろう…
楓さんがあの男と結婚する
ことになったのは
ごく自然な流れなのに…

なぜか不安が心をよぎる…
文香のときにも感じた…
なにか取り返しのつかない
ことが進んでいるような――

それからも――

『んっ♥ちゅっ♥ずちゅるっ♥』

ぶっちゅ

ずずずちゅるるるる

ぶっちゅ

ぶっちゅ

『あ～楓の喉ま○こ気持ちいィ～っ♥』

ぶっちゅ

ブブブ

ブブブ

ブブチュチュ

「あ、あの…ステージ開演までもう時間が…」

「あ～いいでしょ別にファンの連中なんか待たせておけば(笑)」

ぶっちゅ

ぶっちゅ

ぶっちゅ

ぶっちゅ

「楓はファンじゃなくて僕のモンなんだから♥ね～楓♥」

「んぷっ♥ちゅず♥♥」

「ひひ、そーそー ち◎ぽしゃぶるときは股広げてオナニーしながらね♥楓さんってば大人のくせに僕が教えるまでこんな常識も知らないんだから～(笑)」

ヴヴチュチュ

「……」

「にしても…ぷっ❤ファンも思わないだろうな～」

「まさかステージ開始直前に高○楓がち○ぽしゃぶりながらがに股オナニーしてるなんて(笑)」

ぶっちゅ

ぶちゅ

ちちっちゅっちゅ

くぽくぽっくぽっ

「アイドルの喉扶るの最高お❤ごめんね～大事な商売道具ち○ぽしごくのに使って(笑)これから歌うのにねぇ～❤」

「えぐっ❤えぎゅ❤❤」

ヴヴチュチュ

「でも楓が悪いんだよ？可愛らしいステージ衣装で僕のち○ぽ挑発しちゃってさぁ…っ❤ホントは楓も欲しかったんでしょ？僕の…っ❤う❤せ。い。し…っ❤」

『ぅぅ』
ドピュッ
ビュルルッ
ぶびびびびびびっ
えぐぼっ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ブシャッ

「ふほ❤お❤よしよしっ❤こしこしして～
排泄された精液は全部胃に落として～
潮吹きもキメられてカンペキだねぇ～❤」

ドピュッ

ビク

「んぐ❤ん…ぐぎゅっ❤ぎゅっ❤」

ビビビビ

チュュュ

ウウウウ

ビッ

「あ～やば…❤優越感やば～…っ❤この射精すげ～きもち～❤」

ブシャッ

「ファンの皆ごめんね～❤君たちが憧れてる楓は僕の言いなり肉便器で～す❤」

「……」

ビク

『あ～すっきり♥
それじゃ楓、
ステージ頑張ってね～』
けぽ
メスぅ～
とろ～
ベトっ
『んぷ♥は…
はぁい…♥♥♥
『……』
ビク
ビク
ビク
ブシャッ

「ぷ♥ぷろでゅーさー…
それじゃあ…♥♥」

「か、楓さん…開演は
少し遅らせよう。
少し休憩した方が――」

とろ～

ベトッ

メリィ…

「あ～ダメダメ♥
せっかくだから
マーキング直後の
楓をファンに見て
もらわなきゃ(笑)」

「し、
しかし…」

ビク

「わたしならだ…
大丈夫♥です…っ♥」

「ほら(笑)じゃ～レッツゴ～
あ、衣装もそのまま
エロ染みつけたまま
ノーパンでね♥」

ブシャッ

「帰ってきたらご褒美も
あげるから♥頑張って～」

「は、はひぃ…♥」ビク

「……」

文香も――

「ほれ文香…足を上げなさい❤プロデューサーにも見えるようにな(笑)」

ぜーん

「はい、おじさま❤」

むぢ…

「ほほ❤ほれ見たまえプロデューサー…文香の身体、柔らかくなったと思わんか？これも儂との個人レッスンの成果だよ❤」

ヒクヒク

とろ…

「は、はい…ありがとうございます…」

「いやいや、礼には及ばんよ(笑)その分儂もイイ思いをしてるからな❤」

「そ…それでこれは…？もうすぐステージの時間なんですが…」

「ああ、そうだったな(笑)しかし儂のレッスンの方も今日は特別でね…❤なあに、すぐに済むよ」

ぜーン

むっちぃ

「あの…おじさま？セックスするんじゃないんですか？」

ヒクヒク

とろ…

「はは、いやいや…ソレはまだおあずけだ❤期待で濡らしとるところ悪いが(笑)今日はなぁ―」

「文香…これをケツ穴に入れながらステージに立ちなさい❤」
「な――」
「あ……❤」
ぎゅッ
「そ、そんなものが入るわけ――い、いや、そもそも…」
「心配するな(笑)ローションはたっぷりつけてるから❤」
「それにこれも文香のスキルアップのためのレッスンなんだぞ❤」
「し、しかし――」

「だ…大丈夫です
プロデューサーさん♥
私…ヤレますから…♥」
「ふ、文香―」
ぎゅッ
「よしよし、よく言った♥
さすが儂の文香♥」
「よぉし、そうと決まれば
腹の奥まで思いっきり
ねじ込んでやるからな♥
覚悟しろよ～文香♥」
「は、はい…っ♥」

『ほれいくぞぉ～』
『は…っ♥』
ぜっ…
ビュ
『さ～ん…
にい～…
いい～ち…』
『あ』

ずっ!?
ズブ
ズブ
ブチッ

ガク
ずっ!?
ズガッ
ズガッ
ブチッ
ギチィ
ガク
『あ♥が……っ!?♥』
『ん～どうした～？まだ半分しか入ってないぞぉ～(笑)ほれ力を抜かんか♥』

「ほほ、こりゃあ面白いっ❤
ケツ穴から腸液がドバドバ
溢れてきおる❤
ローションはいらなかったな(笑)」
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
「括約筋に全神経を集中させろ❤
何度も排泄してるようで気持ち
イイだろ?
頑張らんか❤儂のち○ぽは
こんなもんじゃないぞ❤」

「ひひひ♥ファンに申し訳ないと思わんのか？待たせておいて自分はケツ穴ほじられてよがり倒しおって穴♥」
べっべっ
ズボズボ
ズボズボ
ズボズボ
ズボズボ
ズボ
ズボ
ズボ
「アイドルがケツ穴からこんな下品な音を出していいと思ってるのかっ♥」
ボボボボ
おっ♥
「っ……」

はぁ♡はぁ♡はぁっ♡

『よし、全部飲み込んだな♡
見たかプロデューサー？
ちゃんと入っただろ(笑)』

「ふ、文香…っ」

ゼワ

ゼワ

ズドンッ♡

ゼワ

ゼワ

ブシャアッ♡

ブチュウッ♡

「まったく、潮まで噴いて
悦びおって…
とんだマゾアイドル
だな文香は♡」

「はぁ…っ♥
はぁ…っ♥
お、おじさまぁ…っ♥」
「わかっとるわかっとる♥
ご褒美なら後でやるからな」
ゼワ
ゼワ
ギチギチ
ゼワ
ミチッ
「今はステージだろ？
これ以上待たせるのも
ファンが可哀想だ(笑)」
「ぐ……ふ、
文香……っ」
トロ…
ブシャアッ
「よしよし♥
それじゃあ頑張って
きなさい♥
踊ってる途中に
いきんでひり出さんよう
気をつけるんだぞ(笑)」
「は…はぁ～い♥」

ときには二人同時に――

「あっ♥あっ♥あっ♥」

「ひひっ♥や♥ヤバッ♥ステージ直後の楓ま○こ超気持ちいいよ♥おじさんっ」

「はぁっ♥はぁっ♥ん♥ふうっ♥」

「そうだろ？ちょっと躾けたアイドルはステージの緊張でま○こを濡らすようになるからな♥

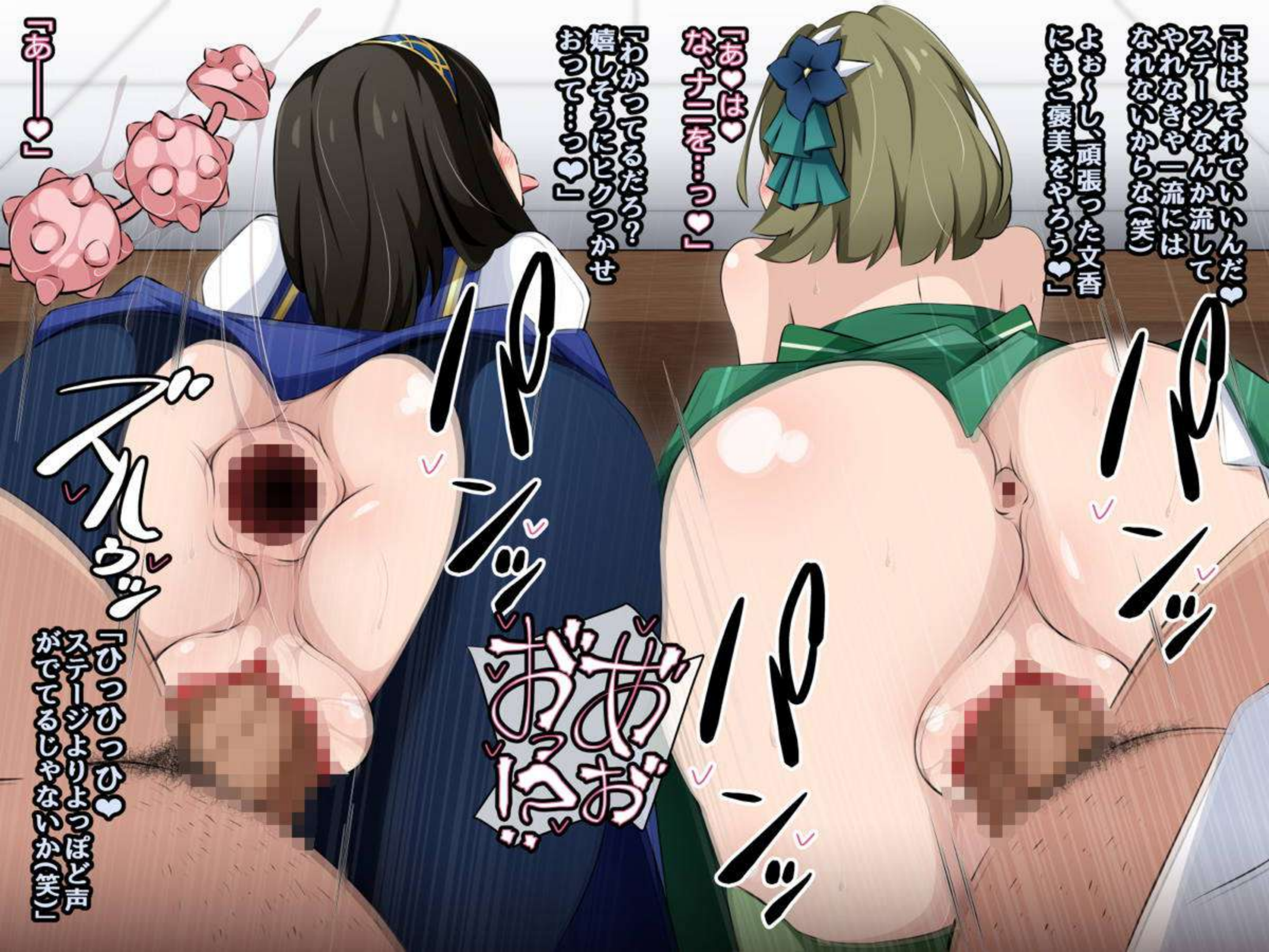
ファンが楽しんどるあのステージは前戯代わりというわけだ(笑)」

「なあプロデューサーくん♥」

『……』

「文香♥特大アナルビーズを入れながらのステージは興奮しただろ？ケツ穴にこんな凶悪なモノ隠しながら平気で踊りおって♥」
「ほれ正直に言いなさい♥」
「あっ♥あっ♥はひいっ♥」
「興奮しましたっ♥前戯代わりのステージ最高でしたあっ♥」
「ほほ、だろうな♥ヒドい出来だったぞ(笑)」
「楓っ♥楓はっ？♥楓も全然集中してなかったよねっ♥」
(二人とも…確かに集中力を欠いたステージだった…
…でも仕方ないよな…こんな状況じゃ…)
「すみ♥ませんっ♥精液の匂いとっ♥『ご褒美』のことで頭がいっぱいでっ♥」
「私もっ♥ケツ穴にばかり集中してててえっ♥」
「ステージのことなんかぜんぜん考えてませんでしたあっ♥」

「はは、それでいいんだ♥ステージなんか流してやれなきゃ一流にはなれないからな(笑)
よぉ～し、頑張った文香にもご褒美をやろう♥」
パンッ
パンッ
「あ♥はな、ナニを…っ♥」
「わかってるだろ？嬉しそうにヒクつかせおって…っ♥」
パンッ
ヒクヒク
「あ―♥」


「はは、それでいいんだ♥ステージなんか流してやれなきゃ一流にはなれないからな(笑)
よぉ～し、頑張った文香にもご褒美をやろう♥」
「あ♥は♥な、ナニを…っ♥」
「わかってるだろ？嬉しそうにヒクつかせおって…っ♥」
「あ―♥」
「ひっひっひ♥ステージよりよっぽど声がでてるじゃないか(笑)」
パンッ
パンッ
パンッ
ずぶぶぶ
ぬぷぬぷ
ズルウッ

「くそ～いいなあ…っ楓も負けてられないぞぉ…♥ちょっとおじさん、ソレ貸して」
「はは、相変わらず負けず嫌いだなお前は(笑)」
「ほら楓さんいくよ～っ♥」
「あ♥えっ♥え？♥」
「ほ…っ♥おぉ…♥」
ビク
ビク
ぼかあ
パンッ
パンッ
ズブッ

「くそ～いいなぁ…っ楓も負けてられないぞぉ…♥ちょっとおじさんガワソレ貸して」

「はは、相変わらず負けず嫌いだなお前は(笑)」

「ほら楓さんいくよ～っ♥」

「あ♥えっ♥え？♥」

ズブッ

「あぁ??♥うぐ…!?♥♥」

きゅうぅぅっ

「おっ♥ほぉっ♥」

「おぉ、さすがだな根元まで一気にずっぷり飲み込むとは♥文香でもひと息では無理だったぞ♥」

パンッ

ビクッ

(は♥あぁ…っ♥さっきまで文香さんのアナルに入っていたモノが私の中に…♥)

「あっ♥コレやばいっ♥」

ぉぉぉぉぉぉぉぉっ

ビクッ

ぼかぁ

「膣奥締まってぇ…っ♥し♥絞られるぅっ♥」

あぁあぁっ
「おっ♥射精るっ♥射精るうっ♥」
ガクガク
みぢ
ドプッ
ブチュウッ
「種付けっ♥ガクガク十分前までファンの前で踊ってた高○楓に種付けぇっ♥」
ビクビク
「ひひ♥気持ちよさそうに射精しおって♥ほれ文香こっちもイクぞ♥」
「は♥はい!」
ビクビク
ぼかぁ
パンッパンッ

あぁあ♡っ

「おっ♡射精るっ♡射精るうっ♡」

ガクガク

みぢぶ

ドクッ

「ひっひっひ♡すっかり膣内射精でイク癖がついたなぁ文香♡」

「種付けっ♡ガクガク十分前までファンの前で踊ってた高○楓に種付けえっ♡」

ビクッ

ぜュるるッ

ぢュぢュぢュ

「あ～やべぇ～小便みたいに射精るわぁ～♥」
ぴゅぴゅ
「他の雄には渡さないっていう男の本能だろうな♥それもステージ終わりのセックスの醍醐味だ♥」
「は、はい…わかりました…」
ドクッ
はぁ～…っ
ビクッ
ビュルッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
（こんな……応援してくれてるファンの気持ちを蔑ろにするような……いや……しかしこの人たちの行動は全て二人のためなんだ…）
「ところで一発で終わりじゃなかろうな？」
「もちろん♥ね～二人とも♥」
「な――」
「あ～プロデューサーくんステージの予定は全て教えてくれたまえよ♥」
「俺も俺も♥アイドルに種付けしてる感がヒ倍増で最高だわコレ♥すっかりハマっちゃったよ～」
ぼかぁ
「あ♥」
「は♥」
「はひい…っ♥」

「う～む❤やはり文香にはステージ用のドレスなんかより下品なエロ衣装がよく似合うな❤」

「……そんなこと……」

「ち○ぽもしっかり根元まで咥え込んで❤偉いぞぉ文香❤」

「ありがとうございますおじさまっ❤全ておじさまのご指導のおかげです❤」

ブリ

ブリ

ごぽ

ドロ

「そのお礼に――文香のおじさま専用スペシャルステージ❤」

「淫乱バニーのアナルファックダンス❤を存分にお楽しみくださいっ❤」

ズッ

ズリ

「ほほ❤儂専用とは嬉しいことを言ってくれる❤アナル拡張したかいがあったわい❤」
「……」
「しかし文香？さっきまでのステージと違ってダンスに集中するのはいいが…肝心のケツ穴が疎かになってはいかんぞ？」
ブリ
ブリ
ごぽ
ドロ
「括約筋で思いっきりち○ぽを食いしばりながら本気でピストンするんだ❤」
「下品で汚い音を部屋中に響かせろ❤わかったな？」
「あ…はい❤わかりましたぁ❤」
ズッ
ズリ

ぼっ!!
「あ…あっ♥おっ♥おっ♥おんっ♥」
ぴょん
ぴょん
ブッポ
ブッポ
ブッポ
ブッポ
「そのままケツ穴をダメにするつもりで続けなさい♥」
「お♥ほほぉ♥」
「い…っ♥いかがですかおじさまあっ♥文香のアナルッ♥ご満足いただけてるでしょうかっ♥」
「うむ、いいぞお♥やはり飲み込みが早いな文香は♥」
ブッポ
ブッポ
ブッポ
ブッポ
「なあに安心しろ♥括約筋が役立たずになってオムツ生活になってもきっとプロデューサーが面倒を見てくれるから(笑)」
「え……?」

「それよりお前はどうなんだ？前に教えただろセックスは互いが気持ちよくなければならないんだぞ♥」

「は♥はいっ♥もちろんっ♥私も気持ちいいですっ♥」

ひょん

ひょん

ブッポ

ブッポ

「あっ♥あっ♥すみません……っ♥おじさまのぶっとい♥ち○ぽが文香のケツ穴に出たり入ったりしてっ♥」

「おじさまのモノが出たり入ったりして何度もっ♥その…用を足してるようで――」

ブッポ

ブッポ

「何度もクソをひり出してるようで超気持ちイイですっ♥ケツ穴交尾最高っ♥」

ブッポ

ブッポ

「おいおい文香…こういうときはもっと下品な言葉を使いなさい♥これも何度も教えただろ？これだけは覚えが悪いなお前は…」

「ふ、文香……」

「ひひっ❤聞いたかね プロデューサー❤ あの文香がここまで 下品な言葉を覚えたんだぞっ❤ 全部儂が教えたんだ❤」

ぴょん

ぴょん

ブッポ

ブッポ

「わかっとるわかっとる(笑) 誰にも漏らしたりせんよ… 文香は儂だけのモノ だからなぁ…っ❤」

ブッポ

ブッポ

「も、モノって… 文香は誰のモノ でも――」

ブチ

ミチ

「あ～ステージに来ていた ファンの連中にも 見せてやりたいわ――」

「やつらの大好きな 鷺○文香が儂の上で 跳ね回っとる姿…っ❤」

「あっ❤あっ❤」

「ちょ、ちょっと――」

ブッポ

ブッポ

「あ～でる…射精るぞお…❤ 儂の文香の…っ❤ ひひ❤直腸にい…っ❤」

おおぉ!!おお
ビク
ブシャッ
ビク
ビク
ブビュルルッ
ブビュルルッ
「直射精だっ♥♥」
『……』

「おっ❤ほぉおお…っ❤」
「ほほほぉっ❤アナルに射精された瞬間に潮吹いてイキおったぁ❤」
「本っ当に肉便器の素質しかないな文香には…❤キミも担当Pとして誇らしいだろ(笑)」
「……」
「ほれ文香…可愛いイキ顔を儂に見せてくれ❤ついでにプロデューサーにもな(笑)」
ビク
ビク
ビク
ブシャッ
ブピュッ
ビュルルッ

「えへ❤あへぇぇ…❤」
「よしよし…❤ほれ見てやってくれこのメス顔…❤こんな表情もできるようになったんだ❤キミが出会った頃からは想像できないだろ？」
「……文香…」
「これほど調教しがいのあるアイドルは儂も初めてだよ❤見つけてきてくれた君には感謝しかないな(笑)」
「は、はい…ありがとう…ございます…」
ブシャッ
ビク
「……」
「なあに、これからも文香のことは儂に任せろ❤このコもそれを望んでるからな❤」
ビュルルッ
ビュルルッ
「は…はひぃ❤これからもよろしくお願いしましゅ…おじさまぁ…❤」
ビュルルッ

「あ～エロコス楓とアナルセックス捗るぅ♥ひひひっ♥ほら楓っご主人様って言ってごらん♥」

ズブッ

ズブッ

「ボクは楓の主人なんだから♥ねぇ、いいよねプロデューサー」

ブチュッ

ワチュッ

「あっ♥ごしゅ…っ♥ご主人様??♥♥」

ズブッ

「ひひっ♥いいねぇ♥これからはボクのことず～っとそう呼ぼっか♥」

「は、はぁ…楓さんさえいいなら…」

「じゃあOKだね♥楓はボクの言うことなら何でもOKだから♥」

「それにしても♥楓の穴はどこも一級品だなぁ～♥」

「あっ♥あっ♥」

ズブッ ズブッ ズブッ ズブッ

「はっ♥はひっ♥おっ♥お願い♥しますっ♥ご主人様ぁ♥楓のケツ穴ほじりまくってえっ♥」

「ぎっちぎちに締めつけてきて痛いくらいだよ♥」

ブチュッ ブチュッ

「初めてレイプしたときを思い出すなぁ～…すぐにこっちもボクのサイズに広げてあげるからね♥」

「ご主人様のカタチっ♥直腸に覚え込ませてくださいいっ♥」

「いいねいいね～楓もノッてきたね～♥ステージ終わりでハイになってるのかな？（笑）」

「それじゃあお望み通り最後まで使ってあげるからね❤上手におねだりできるかな？」

「はいっ❤❤」

ズブッ ズブッ ズブッ

「いつでもお好きなときにい❤お好きなところにお射精しくださいっ❤」

ブチュッ ブチュッ

「アイドル高○楓はご主人様専用の便所妻ですうっ❤楓に空いてる穴はぁぜ～んぶご主人様が気持ちよ～く射精するための穴なのでえ…❤」

ズブッ

「か…楓さん…」

「ふぅーっ❤ふぅーっ❤いいよぉ…っ❤アイドルとしてステージに立つクールな姿からは想像できない媚びっ媚びのま○こ顔っ❤アイドルが絶対言っちゃいけない下品な台詞っ❤あ～精子上ってくるう～っ❤」

「おほほ～っ♥♥」
ドビュルッ
ブビュビュルッ
えぐっぱ!!

「あはぁ～きもちい～っ❤
楓の排泄穴に精液排泄
きもちい～～っっ❤❤」

「ほぉ❤おぉお…っ❤」

ドビュッ

ブビュビュッ

「言った通りボクは
ご主人様だからねぇ❤
人前だろうとキチンと
そう呼ぶんだよ❤
ボクたちがデキてるって
ことガンガンアピール
していこうね❤」

「あ…は❤はひ…っ❤」

「ひひひ❤楓の主要穴
コンプリートお…っ❤
これで楓はカンペキに
ボクのモノ～って
マーキング完了し
ちゃったあ～❤」

（くそ…こいつも楓さんを
モノみたいに……っ）

「じゃ、そういうこと
だからプロデューサー（笑）
ヘンな噂とか立っちゃう
かもだけど…
事実だからしょうがない
よね❤」

『……は、はい……』

「ん～夜風が気持ちいいねぇ～楓❤」
「わ❤わんっ❤くぅ～ん❤」
「おお～ちゃんと鳴き声でお返事❤優秀なペットだね～楓わんこは❤」
「誰かに見られたら一発で大スキャンダルのお散歩プレイ気に入ってくれたみたいだね❤」
「わんわん❤❤」

「よぉ～し、じゃあ今日こそケツアクメ頑張ろうね❤文香ちゃんみたいに潮吹けるように❤」
「は…わん…っ❤」
「大丈夫大丈夫今日は補助付きだから――」

「よぉ～し、じゃあ今日こそケツアクメ頑張ろうね❤文香ちゃんみたいに潮吹けるように❤」
「は…わん…っ❤」
「大丈夫大丈夫今日は補助付きだから――」
「楓わんこの尻尾は特別製でね～❤」
なみ
「バイブの奥から仕込んだ媚薬を注入できるようになってるんだよ❤」
ズッ
プリ
「これキメればケツアクメなんて一発だから❤」
「あ❤あ…❤」
「ほい起動っと❤」

キャっ!?
「っ…冷た…っ♥」
「お～動いてる(笑)
尻尾振って悦んでる
みたいだな～
このエロ
わんこめ♥」
フリ
フリ
うぃん
うぃん
ゴポポポポ
「ほら頑張れ頑張れ～
あと少しだぞ～」
「あ♥あ♥あ…っ♥」

ビクッ!
「ひひひ、効いてきた？即効性のイケナイお薬を直腸で吸収しちゃってるからね～❤効き目バツグンでしょ❤」
「は❤はぁーっ❤はぁーっ❤」
フリ
フリ
うぃん
うぃん
ゴポポポポ
「ほら意識をケツ穴に集中～そのために目隠ししてるんだからね～」
「は…っ❤あつぅ…っ❤」
「じゃあ腸に詰まったバイブ一気にひり出してみよっか❤思いっきりいきんで自分でね❤」
「はひ❤はひい…っ❤」

おぉぉぉぉぉぉ!!
ゼク
ゼク
「おっほ♥出た出たぁ～♥」
ズルゥッ
ブシャアッ
ゼク

「よぉ～しよしよし❤偉いぞ～楓❤上手にケツアクメできたねぇ～❤」

「あーっ❤あーっ❤❤」

ゼワ

ゼワ

「いひひひっ❤ケツ穴から媚薬キメて潮吹きガチアクメ❤道端に愛液マーキング…❤」

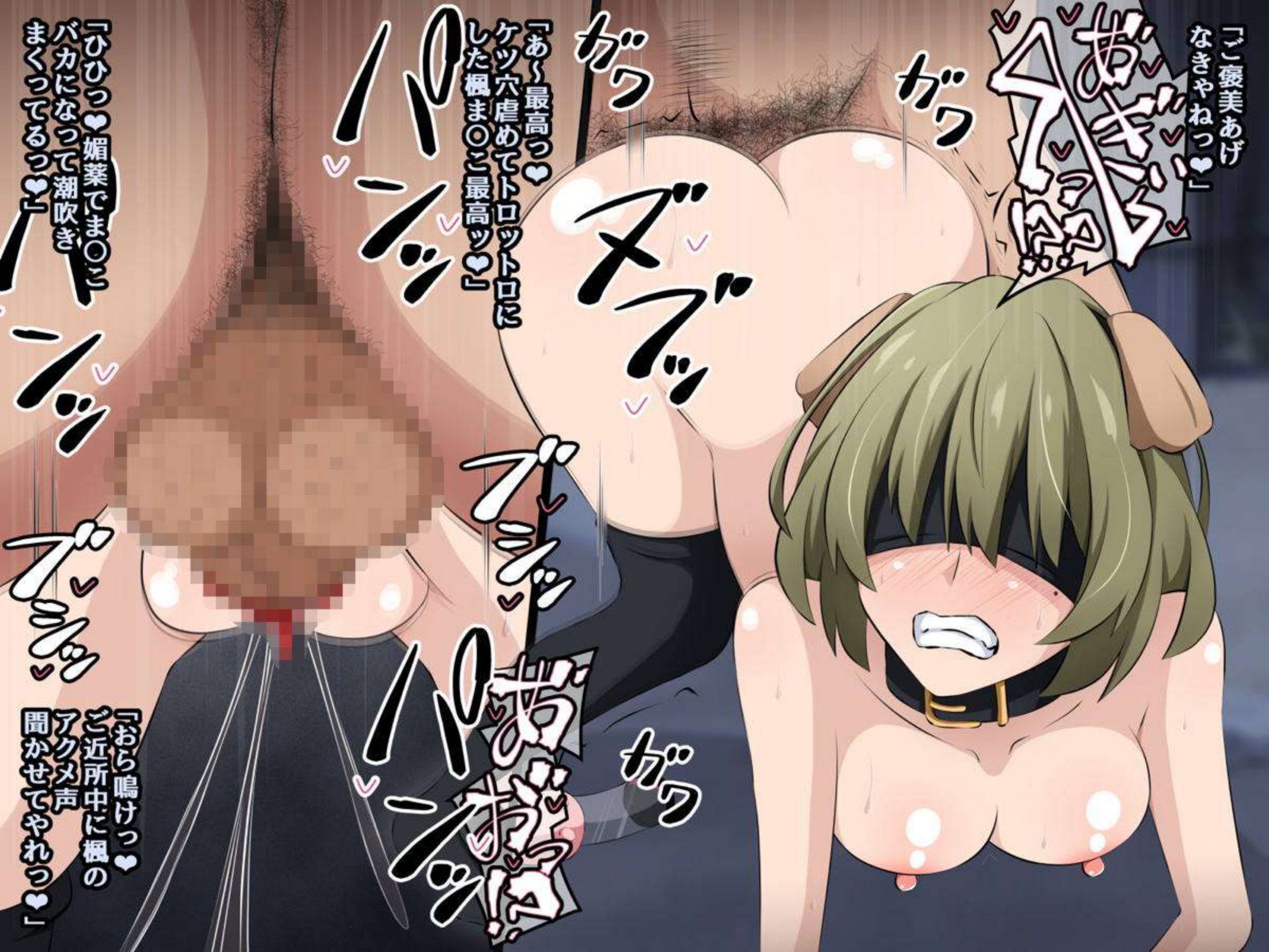
ぽっ

かッ

ゼワ

「超人気アイドルなのにAV女優顔負けのプレイができちゃうエロわんこにはぁ…」

ブシャアッ


「ご褒美あげなきゃねっ♥」
あぎぃ
ガワ
ガワ
ダブッ
「あ～最高っ♥ケツ穴虐めてトロットロにした楓ま○こ最高ッ♥」
パンッ
パンッ
ブシッ
ブシッ
ぶぎぃ
ぶぎぃ
ガワ
「ひひっ♥媚薬でま○こバカになって潮吹きまくってるっ♥」
パンッ
パンッ
ブシッ
ブシッ
「おら鳴けっ♥ご近所中に楓のアクメ声聞かせてやれっ♥」

「おっ❤
ほぉ〜っ❤❤❤」
ブシャアッ

「あ～イイ～❤❤
夜のお外で楓わんこと
ガチ交尾クセになるぅ～❤」
おほぉ
おぉ
おぉっ
ぶぜゅ
ぜゅるるッ
「にしても良く効くなぁ～
さすがおじさんに回して
もらったクスリ❤」
ぶシャアッ
「楓も気に入った
みたいだし❤
これからもときどき
使おうね～❤」
はぁはぁ
「最後の一滴まで…ひひっ❤
楓の遺伝子とまぜまぜ
しあわせ～❤」

「なあに用量を
守れば問題ない。
ほれヤッてみろ…
気持ちいいぞ♥」

「せ…せら…」

「せ…せら…」

「鼻から一気に吸い込め❤
そこにあるだけ全部な」
「は…あ…」
ストロー

「鼻から一気に吸い込め❤
そこにあるだけ全部な」

「は…あ…」

ズズズッ

「鼻から一気に吸い込め❤そこにあるだけ全部な」

「は…あ…」

ズズズッ

「あ❤あ？❤あ…っ❤」

チカ

「よしよし❤効いてきただろ？頭と子宮にガツ～ンとな❤」

チカ

「ひひひ❤じゃあ次はどうすればいいかわかるな？」

「は❤はい…❤」

「はい…っ❤❤」

「はっ♥はっ♥はっ♥はあっ♥はあっ♥」

「ひっひっひ♥どうだ文香？今までとは比べものにならんほど気持ちいいだろ♥」

「はいっ♥あっ♥はいいっ♥♥」

「そうだろそうだろ♥女はみ～んなこの薬が大好きだからな♥アイドルだって例外じゃないぞ♥」

バチュッ

バチュッ

バチュッ

ブチュッ

「イイっ♥あっ♥イグッ♥♥♥何度もイッてるのに腰止まらないひいっっ♥♥♥♥」

「この薬のためだけに生きてるアイドルも何人もいるからなあ…♥」

「ああ、安心しろ文香❤お前はハマり過ぎて壊れないよう儂がしっかり管理してやる」

「お前はまだまだ壊すには惜しいからな❤」

「あっ❤ありがっ❤ありがとうございまっ❤❤」

「…ひひっ❤それにしてもついにキメセクまで覚えてしまったなあ文香❤ビッチらしい格好も似合ってるぞ」

バチュッ

バチュッ

バチュッ

ブチュッ

ブチュッ

「今まで控えめに生きてきた反動か(笑)これからはどんどん悪いコトも覚えていくんだぞ？儂専用のイイ性玩具(アイドル)になるためにな❤」

「はあっ❤あっ❤あ～っ❤」

「よし❤今日は特別に注射も一本打ってやる❤」
ブチュ
ズス
ビク
ビク
ビク
おっ!!
「初キメ記念にな❤ほれイキ狂えっ❤儂もイクぞお～っ❤」

「ほほお〜っ♥」
ガワ
ガワ
ガワ
ドクン
ブビュ
ブビュ
ビュビュッ
ギリ

「ひっひっひ♥豚のようなイキ声を上げおって♥」

「やはり薬でトロけさせたメスガキま○こに射精するのはたまらんのぉ～♥」

「あ～～～っ♥あぁ～～～～っ♥♥」

「おっ♥♥ほぉおおお♥お～っっ♥♥」

ドクッ

ガワ

ガワ

ガワ

ブビュビュッ

ブチュビュッ

ビュッ

「あぁ、ひとつ言い忘れたがこの薬を使うと卵巣がバカになってしまってな？受精確率が跳ね上がってしまうんだが…別に構わんよな？(笑)」

「聞こえ取らんか(笑)このままでは二人とも仲良く孕んでしまうかもしれんなぁ…」

同じ成分の薬を回してやった高○楓と同時にな…♥」

そんなことが
続いたある日――
「二人ともちょっといいか？
明日のステージのことで相談が…」

「あ、ごめんなさい
プロデューサーさん
私これからおじさまとの
レッスンがあるので――」
「なにかあるなら
明日のステージ直前に
教えてください。
それでなんとかなるでしょう」
ふぃ…
「私も…
これからご主人様と
デートなので…
もう失礼します」
「ちょ、ちょっと
二人とも――」

ふあ
んっ
ツル

「……？どうしたんだ？」
「……いま……何か……♥」
ドキ♥ドキ♥
「……ええ……私も……♥」

「？なんなんだ…？」
「いえ、なんでもありません♥ただ――」
「きっと気のせいでしょう♥ただ――」
「……？？」
キュン
「なんとなく気持ちてんとなだけなのにもな幸せなのでな♥っせたな」

このときに気がついていれば
まだ間に合ったかもしれない…

……いや……手遅れか…
もうきっと……最初から――

数週間後――

「は、はっ、はぁっ、
はぁ――っ」

「文香ーっ」

メチュ
ぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ
ぺろぺろ

「よしよし、いいぞぉ❤」

シコ
シコ

ブチュ

「そのコリコリしたところが前立腺だ❤そのあたりを重点的に舐めなさい❤」

ぬゴゴ
ろリコリ
ろおリ

「はあ…はあ…ふ…文香…」

「おお、プロデューサーくんじゃないか早かったね(笑)」

ぢぢぢゅ
ゆゆゆ
はははっ
っっっ

「おほっ♥
ほっ♥ほ♥」

ぜュるッ

ぜュにュるッ

メヂュ
メヂュ

「ひひ♥ほれ文香…
プロデューサー
来てくれたぞ？
きちんと顔を
見せてあげなさい。
儂のケツ穴が名残惜しい
のはわかるが（笑）」

「……」

「ちゅ♥ちゅ〜っ♥
ぷぁ…♥はぁい♥」

「ぷはっ♥ごめんなさいプロデューサーさん♥プロデューサーさんを待ってる間にアナル舐めを教わってたんですけど…おじさまのケツ穴が美味しくってつい…♥」

「い…いや…」

ぜぜっ

トロ…

ヌトト

ペろ

「そ、それより…っ本当なのか…電話で言ってたこと…」

「……はい♥ホントですよ―」

「私…妊娠しちゃいました♥」
「……!!」
ゼゼワワ
トロ…
ストン
ス…
「もちろんおじさまの子です♥ばっちり当てられちゃいました♥」
「いやあすまんね(笑)レッスンがてらつい勢いあまって孕ませてしまったよ♥」

「……そ…それで…どうするんだ…？」
「はい♥私…産みたいと思います♥せっかく授かったおじさまとの子ですもの♥産んであげたい…♥」
「……で、でも産みます♥」
「……」
せせっ
トロ…
「いやあすまんね♥いつの間にか文香の心を射止めてしまっていたらしい(笑)まぁ共演者に愛が芽生えるなんてよくある話じゃないか♥」
ヌトッ
「ごめんなさいプロデューサーさん♥……それで…実はプロデューサーさんにはひとつお願いが…」
「……ああ…仕事の調整ならなんとか――」
「ああいえ…そうじゃなくてプロデューサーさんには――」

「子育てをお願いします❤私が孕まされてしまった責任❤取ってくださいね❤」

「え……っ!?」

「何を驚いとる？担当のアイドルが妊娠したらプロデューサーが責任を取るのは当たり前だろ？キミが寝取られたのが悪いんだから(笑)」

ゼゼワワ

トロ…

「頼むよ❤本来は儂が責任を取るべきなんだが、儂はプロデューサーではないからな(笑)」

ヌトト

オルルル…

「なあに心配するなアイドルの仕事の方は儂が調整してやるから」

「……は、はい……」

「ただし十ヶ月後は覚悟しておけよ？忙しくなるぞ～なにせ一人じゃないからな…❤」

「……？楓さんから…電話…？」

「はあ…はあ…」

「んう～♥」

「おっ♥おっ♥
持ってかれるう～♥
ひひっ♥
すっかりフェラにも
慣れたね～楓♥」

「か、楓さん…」

「あ、プロデューサー
いらっしゃ～い♥
ごめんね～
ちょっと待ってて
いま射精しちゃうから…♥」

「おほっ❤
ほら見て見て
この激しい
喉奥ピストン❤
これ僕が仕込んだ
んだよ～」

「いや～苦労したよ～
やっぱりアイドルにとって
喉って大事みたいでさ～❤
でもほら、この通り❤
やっとわかったみたいだね～
歌なんかよりち○ぽ気持ち
よくする方が大事だって❤」

「……」

「ひひひ❤
チン毛に顔うずめちゃって❤
もうち○ぽに夢中だね❤」

ゴチュ
ゴチュ
ゴチュ

「ぶひょ❤」
「おほ～❤
楓の喉ま○こに射精っ❤
しあわせ～❤
楓～まだ飲み込んじゃ
ダメだよ～❤お口に溜めて…
ってわかってるか❤
毎日してるもんね～❤」
ぼっ
どぴゅ
ぴゅ
ぴゅ

「あ～ん♥♥♥」

「お～ひひ♥
ほら見てプロデューサー
楓のお口にこんなに
いっぱい射精しちゃった♥」

「……」

「じゃ～楓♥
ソレ食べていいよ～」

「ふぁい♥
いたらきまぁす♥」

ぐぱぁ

ぬぽぉ

ヌトト

「あ～ん♥♥♥」
「お～ひひ♥ほら見てプロデューサー楓のお口にこんなにいっぱい射精しちゃった♥」
「……」
「じゃ～楓♥ソレ食べていいよ～」
「ふぁい♥いたらきまあす♥」
もぐ
もぐ
「あむっ♥」
ぬぽぉ
ヌトト

「はあ～♥♥
ごちそうさまでした♥」

「はいお粗末様でした♥
ひひ、くっせ～ザー臭(笑)
アイドルがさせていい
口臭じゃないよ♥」

「……
……あ、あの…」

むあ

ぬぽお

ヌトト

「あ、そうだそうだ
お待たせ(笑)
ほら楓、プロデューサー
に見せてあげて」

「はい♥
あの、プロデューサー…
お電話でもお伝えしましたけど…」

「私、ご主人様の子を妊娠してしましました♥」

「か…楓さんまで…」

「あれ？もしかして知ってた？……おじさんめ～妊娠報告ドッキリは僕が最初にしたいって言ったのに…」

（こいつら…文香や楓さんの妊娠を遊びみたいに…っ）

「まあいいか(笑)じゃあわかってるよね？子育てはプロデューサーの仕事だってこと…♥」

「すみません♥お願いしますねプロデューサー♥」

ヌトト

「あ、それから
楓には妊娠のコト公表
させるつもりだから❤
僕の名前は伏せるけど(笑)
これでアイドルも
晴れて引退だね～❤」

「……そ、そんな…
……か、楓さんは
それでいいの…？」

「はい❤
ご主人様を気持ちよく
することだけが私の幸せ
ですから❤
私が妊娠を公表したら
全国のファンから私を
取り上げた感じがして
支配欲が満たされる…
そうですよね、ご主人様❤」

「そうそう(笑)
よくわかってるね～楓は❤
さすが僕の便所妻❤」

「……っ」

ヌトヽ

「じゃ、そういうことだから❤
十ケ月後はよろしくね～
プロデューサー(笑)」

そして
十ヶ月後――

「ん～楓～❤
僕の楓～❤」

「んっ❤ご主人様❤
またこんなところで…❤」

「ごめんね～❤
楓を好きな気持ちが
抑えられなくてさ～(笑)」

ぶちゅう

むぎゅ～

ぼ

もむ

もむ

「うひひ❤またお腹
おっきくなったな～❤
僕たちの愛の結晶が
育ってる証拠だね❤」

「んっ❤
ちゅっ❤ちゅっ❤」

「んちゅ♥嬉しいですけど…♥
また誰かに見られちゃいますよ♥」
ぶちゅう
「いいよ別に～
僕たちが結婚してるのは
ホントのことなんだから♥
逆にこれくらいは見せて
ファンだった人たちに
サービスしなきゃ(笑)」
むぎゅ～
ぼ
もむ
もむ
「ほら楓、あっちの影から
狙ってる週刊誌のカメラ
めがけてピース♥」
「はぁい♥」

ゾクゾク

ゾクゾク

ピースピース

「ははは、アイツめ
また派手にやってるな(笑)
週刊誌に撮られるのは
これで何度目だ？」

『……』

電撃結婚で引退した
元人気アイドル
高◎楓が妊娠!?

ハメ撮り動画の流出…
現役時代から続く『ご主人様』
との怪しいカンケイ…

「過去に出したCDやら
写真集やらが大量廃棄
されてちょっとした
騒ぎになってるらしい
じゃないか(笑)
キミも元担当として
頭が痛いだろ(笑)」

「は、はあ…」

「まあ気持ちはわからんでもないがな？ほれ見てみろこの腹…あのスレンダーなモデル体型が見る影もないじゃないか❤」

電撃結婚で引退した元人気アイドル高◎楓が妊娠!?

ハメ撮り動画の流出…現役時代から続く『ご主人様』との怪しいカンケイ…

「アイドルを孕ませて腹をボッテリ膨らませファンを裏切らせる❤オスとしてこれに勝る優越感はないだろ❤」

『……』

「なあ文香♥」
むにぃ
たちゅ
たちゅ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
たゅん
たゅん
「あっ♥あんっ♥
おじさまっ♥
おじさまぁっ♥」
『……』

「あの……」
「はは、心配するなプロデューサー(笑)」
むにぃ
たちゅ
たちゅ
ズブッ
ズブッ
たゅん
「まさか文香がこんなみっともない腹を揺らしてセックスしてるとは誰も思わんわけだ(笑)」
「はいっ♥ありがとうございます♥」
ブチュ
ズブッ
ズブッ
たゅん
「儂のプライベートビーチにいれば安心だ♥文香の妊娠が世間にバレることはない…」
「は、はい…で、でもその……お腹の…ソレは…?」

「ああ、これか❤そういえばキミにはまだ見せてなかったなこのタトゥー❤」

「たいタトゥーって」

たちゅ たちゅ

ズブッ ズブッ

たゅん

「ごめんなさいプロデューサーさん❤おじさまの子供を妊娠したのが嬉しくてつい……」

「いやあすまんすまん❤文香のボテ腹に似合うと思ってつい下品なのを彫ってしまったよ(笑)ほれ文香も謝りなさい。お前が彫りたいと言ったんだからな❤」

「はいっ❤」

ズブッ ズブッ

た

「一生消えない落書きお腹に入れちゃいました❤もう水着の仕事はできませんね(笑)ごめんなさ〜い❤」

「…文香……」

「そんな顔をするなプロデューサー❤文香だって悪気はなかったんだ(笑)……おっと……そろそろ――」

ばっ
ずびゅるるッ
「射精すぞ文香っ♥」
『……う……』

「ひっひっひ❤
やはりたまらんの～
鬱勃起した童貞Pの隣で
無責任に孕ませた
アイドルに膣内射精❤」

「く……」

ブビュルッ

「おじさまが孕ませた
からこうなったのにっ❤
十ケ月間大事に育てたコ
に精液かけながら
そんなこと言うなんて❤」

ゼワ

ゴポ
ポポ
ブチュウ
ッ

「この崩れた体形…っ❤
まったくなんだ～この腹は？
せっかく射精してやってるのに
肝心な部分…儂と文香が
繋がってる部分が見えないじゃ
ないか❤」

「ああぁんっ❤❤
おじさまのイジワルぅ❤」

ゼワ

「おおそうだ、十ケ月…
もう予定日だったな❤
ひひ❤それじゃあ
そろそろ…
産ませてみるか❤」

「ほれ文香
あ～んしなさい❤」
『あ～ん❤』
「はは、近頃は前に増して
さらに従順になったな❤
まだこの薬が何かも
わかってないのに(笑)」
「ちょ、ちょっと…」
「いやいや、安心しなさい
ただの陣痛促進剤だ❤
医療機関でも使われて
いる普通の薬だよ
ほれいくぞ～❤」
はぁ～…

「あむっ♥」
ぱくっ
「おっナイスキャッチ♥
ははは、こうしてると
餌付けしてるようで
面白いな(笑)」
「……」
「さて…薬が効いてくるまで
少し時間がかかるから…
その間に文香には――」
ごっくん

「今日の分のご褒美をやろう♥」
「あっ♥」
「な……っ」
「ほ～れ文香の大好物だぞ♥
ひっひっひ♥
お前のホントの餌は
こっちだったなぁ～♥」
さらに
ビンッ

「そ、それって…っ」

「ん？　今更何を驚いておる
見せるのは初めてだったか？
文香がドラッグをキメるところ♥
もう随分前からヤッてるんだがな？
それこそ妊娠する前から…」

「はぁ～っ♥
はぁ～っ♥」

うず

うず

「はぁ～っ♥
おじさまっ♥
早くっ♥
早くうっ♥」

「はしたないぞ
アイドルが涎を
垂らして(笑)
ほれ待て～
まだ『待て』だ♥」

「はぁ～っ♥
はぁあ～っ♥♥」

「心配するな…
確かにさっきのとは違って
思いっきり人体に有害な
シロモノだが(笑)」

だら

だら

「文香にはちゃんと
容量を守らせている♥
ほれ、クスリを前に
してもちゃ～んと
『待て』ができてる
だろ？ギリギリだが(笑)」

「……っ」

「あ、こらっ(笑)」
ぶっ
『!!』
「全く仕方ない雌豚だな
文香は❤
竿まで舐める必要は
ないんだぞ❤」
「だってぇ~っ❤
ふごっ❤
おじさまのち〇ぽ
美味しいもぉん❤
おち〇ぽ舐めながら
キメるの最高ぉ~❤」
ズズゥッ
べろぉ

「えへぇ♥
あ～キクぅ～♥♥」
「プロデューサーの前で
取り繕うのも完全に
忘れてるな(笑)
まあこれも若気の至り
ということで許して
やってくれ♥」
「これでも気を使って
痕が目立つ注射は
控えてるんだぞ？
そのあたり、逆に感謝
してもらわんと(笑)」
「は、はい…
ありがとう
ございます…」
「やっぱ鼻から
吸うのがいちばぁん♥
脳にい♥ひひひぃ♥」
ズキズキズキ
はぁ
はぁ
「確かにもうクスリなし
ではまともな生活も
送れない身体だが、
芸能界では珍しいこと
ではないからな♥」

ハ♡ぁ♡
「問題あるまい
アイドルなんて
頭すっからかんでも
できる仕事なんだから♥
なあ文香、大丈夫だろ？」
ブチッ
ブッ
「文香…っ!!」
「これこれ、大騒ぎするな
鼻血くらいで…
脳の血管かどこかが
キレただけだろ♥」

ハ♡おマ
「問題あるまい
アイドルなんて
頭すっからかんでも
できる仕事なんだから♥
なあ文香、大丈夫だろ？」
「だいじょ～ぶ
で～すぅ…♥♥」
「ほら(笑)
これで出産の痛みも
全部快楽に変わる
からな～♥」
「く……」
ブチッ
ブッ
「文香…っ!!」
「これこれ、大騒ぎするな
鼻血くらいで…
脳の血管かどこかが
キレただけだろ♥」

「そろそろ陣痛誘発剤も効いてきたろ❤文香、尻をこっちに向けなさい」
「はぁ～い……❤」
ビク
ビク
ズキズキズキ
だら
だら
「記念すべき初めての出産だからな❤儂も手伝ってやる❤」

●REC

『ほれキバれ～文香♥直腸越しに儂のち◎ぽで押し出してやるから二人で頑張ろうな～♥』

『ふんっ♥ふんっ♥ふんっ♥ふんっ♥』

『はっ♥はっ♥んっ♥あっ♥』

ブッ

ブッ

ブッ

ズズキキ

フラ

フラ

『はっ♥はいいおじさまぁ♥』

『……』

●REC

『ひぎっ!?❤』

『おっ破水したな❤いよいよだぞぉ～』

ブッ

ブッ

ブッ

ズズキキ

ドッ

ドッ

ドッ

『おいプロデューサーしっかり撮っておいてくれよ？文香の記念すべき初出産だからな❤』

『は、はい…』

『あぐっ❤ふっ❤くる…くるっ❤』

『産まれるっ❤おじさまぁっ❤産まれるうう❤』

『ほれイクぞ～❤準備はいいか～❤』

『よぉし文香❤焦るな…直腸に射精してやるからその勢いで一気にひり出すんだ❤できるな？』

『あぁっ❤ああああああ～つ❤❤』

●REC

『ほっ♥っ♥』

ドプッ

ブ

ズ

ぶぶぶぶぶぶぶぶ

ぬ？

●REC

『おお～❤ほ❤ほほ❤
えらいぞお文香❤
ひひひ❤
最高の気分だ❤』

ドォォォ

●REC

『お～お～❤あれだけ薬をキメてたわりに随分元気な子供じゃないか❤頑張ったな～文香❤』

メポォ

ぽっかり

『しかし休んでる暇はないぞ？腹が引っ込んだらアイドルにも復帰せにゃならんし…それにすぐ二人目も作るからな❤』

『！』

ドロ…

ぽっぽ

ガク

ガク

『なあに子育てはプロデューサーに任せればいいし…お前は儂との子作りに集中してればいいから❤』

おぎゃあ

おぎゃあ

『なあプロデューサー？それが文香のためだからな』

ガク

『は…はい…』

●REC

『ようし、そうと決まれば早速セックスするか❤出産直後のま○こもまた乙なものでな❤』

メリポォ

ぼっか

ドロ…

はぁ

ガク

『ひひひっ❤絶対逃がさんぞ❤死ぬまで儂のガキを産んで産んで産みまくる❤それがお前の存在価値だ❤わかったな？』

はぁ…

ガク

ガク

おぎゃあ

おぎゃあ

「あ、終わった？（笑）」
「なんだ、来てたのか全然気づかなかったぞ」
「結構前から着いてたよ～でもみんな文香ちゃんの出産に夢中になってるからさ～（笑）」
なでなで
「か、楓さん……」
「ふふ……♥お久しぶりですプロデューサーさん♥」
「仕方ないから楓の母乳飲みながら待ってたんだよ♥」
ちゅぱ
ちゅぱ
むにゅ
「まだ出産前なのに出るようになってさ♥これもお薬の副作用かな？
んちゅ♥んちゅ♥
あ～楓ママのおっぱい甘くておいしい～♥」

「もう♥ご主人様ったら…ホントに仕方のないおっきい赤ちゃんでちゅねぇ♥私の身体をこんなにした張本人なのに…♥」

「んぷぷ♥」

「ほら見てください プロデューサーさん♥お腹だけじゃなくておっぱいも大きくなったんですよ♥貴方と会ったときからは想像もできないみっともない体型になってしまって…♥」

「う……」

「はっはっは、嬉しそうにしおって(笑)そっちの調教も行くところまで行ってるな(笑)」

「やだなぁおじさん 僕たちは夫婦なんだから子供ができて喜ぶのは当たり前じゃん♥ね～楓♥」

「はい♥」

ちゅぱ

ちゅぱ

むにゅ

「さ～て、じゃあそろそろ楓も出産しよっか♥プロデューサーもお待ちかねみたいだし(笑)」

「い、いや……」

「♥♥はい…ご主人様♥」

「陣痛促進剤も飲んで♥準備完了です♥」

ごっくん

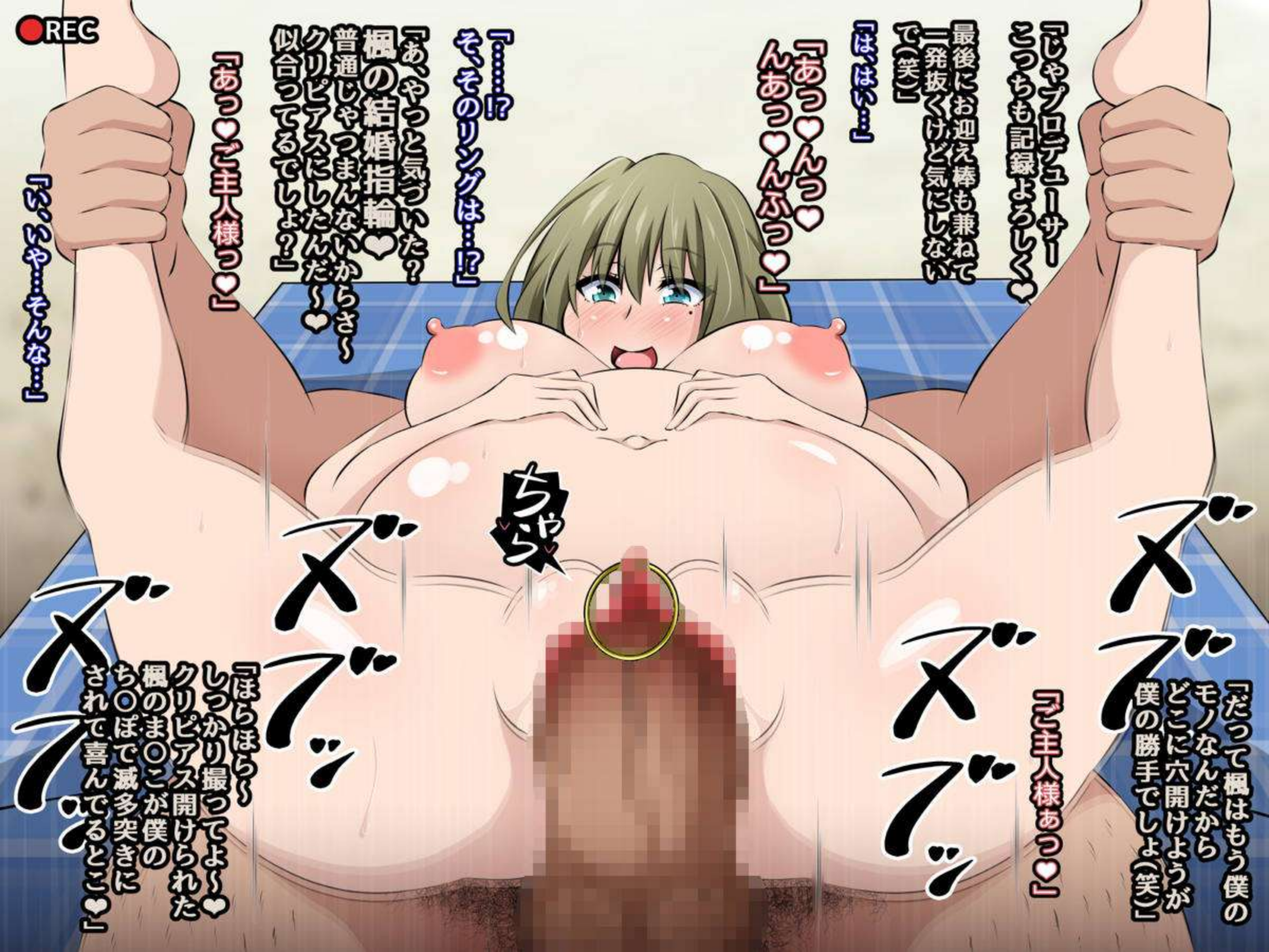
ちゅぱ

ちゅぱ

おにぃ

「いやぁ～このふかふかボテ腹枕がなくなっちゃうのは名残惜しいけど…♥まあまた孕ませればいいし♥」

「とにかくまずは第一子♥産んじゃおうね～♥」


●REC
「じゃプロデューサーこっちも記録よろしく❤
最後にお迎え棒も兼ねて一発抜くけど気にしないで(笑)」
「は、はい…」
「あっ❤んっ❤んあっ❤んふっ❤」
「……!?そ、そのリングは…!?」
「あ、やっと気づいた?楓の結婚指輪❤普通じゃつまんないからさ~クリピアスにしたんだ~❤似合ってるでしょ?」
「あっ❤ご主人様っ❤」
「い、いや…そんな…」
ちゃら
ズブッ
ズブッ
ズブッ
「だって楓はもう僕のモノなんだからどこに穴開けようが僕の勝手でしょ(笑)」
「ご主人様あっ❤」
「ほらほら~しっかり撮ってよ~❤クリピアス開けられた楓のま○こが僕のち○ぽで滅多突きにされて喜んでるとこ❤」

●REC
「ほら楓は集中っ♥ノックしてるおち○ぽにお返事して子宮口ぱっくり開く準備して♥」
「はいっ♥♥あっ♥お腹のコ♥動いてるっっ♥」
「パパに早く会いたいって出てこようとしてるのわかるっ♥♥」
「ぶひひひ♥ほんと？じゃあパパも張り切っちゃうぞ～」
ゴッ
ゴッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
「あっ♥はげし…いっ♥♥ぎっ♥うひ♥くるっ♥」
「おら出てこい出てこいい～♥」
「破水アクメくるううううっっ♥♥」

●REC
『おほっ♥あったけ～♥』
おおっ
ブシャアアッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ
『ひひひ♥やったな～♥それじゃお返しに…っ♥』

●REC
「ほいっ♥」
ずっ!?
ゴドビュ
ポポポポポポッ
ド
ォう
「ほっほほ～♥羊水に精液まぜまぜ最高お～♥」
「ほ～らパパのにがぁいミルクでちゅよ～♥♥」

●REC
「ふぅ〜♥よ〜し、破水もしたし、これで後はガキをひり出すだけだね♥」
「ふぐ…っ♥ふぅ〜っ♥ふぎぃ〜っ♥」
「ほら頑張れ楓〜♥頑張ってプロデューサーに母親になるところ見せてやれ〜♥」
「はひぃぎ…っ♥♥み…っ♥見てください プロデューサーぁあああ……っ♥」
「か、楓さん……」
ブル
ズキズキ
ブル
「私がっ♥ご主人様の子を産むところぉおお〜ッ♥♥」
ズキズキズキズキ
ドロ
ズロォ
ブル
「しっかり…見…あッ♥♥あああああああッ♥♥」

●REC
『あ…!!』
『♡っ♡』
ぶるぶるぶるぶる
ズ
ル
あ♡

●REC
はぁ～っ♡はぁ～っ♡
「ひひひっ♡産まれたぁ～っ♡ついに楓から僕の子産ませてやったぞぉ♡ほらプロデューサーも祝って祝って♡」
「お…おめでとうございます…」
「お～元気な女のコ♡きっと楓に似てかわいいコだな～」
ガワ
ガワ
ガワ
「プロデューサーもご苦労様♡おかげで楓がぶっさいくな顔して出産する感動の映像を残せたよ(笑)」
おぎゃあ～
ドチャ
「ひひ、これもネットに上げちゃおうかな～♡この感動はみんなで分かち合うべきだよね(笑)」

『……』
「それじゃあプロデューサー子育ては任せるぞ(笑)」
ほっ
メボッ
メボッ
「儂らはセックスで忙しいからな❤」
ほっ
おぎゃ
おぎゃ
あおっ
メボッ
メボッ
おっ
「ひひぃ〜❤楓の出産直後ま◎ことろけるぅ〜❤❤」

「あ、あの…出産したばかりなのに二人の身体への負担が大きいんじゃ……」
ほっ
メボッ
「そうだよぉ♥ママになったばかりの梶ま◎こ安心するぅ♥」
おギャ
「いやいや、君は出産直後のま◎こを味わったことがないからそんなことが言えるんだ。そういえば君は童貞だったか(笑)」
ほっ
メボッ
「この奥の奥まで開ききった子宮で ち◎ぽを柔らかく包まれる快感♥これは今しか食えない希少品なんだよ♥」
あおっ
メボッ
「まさに母の愛♥おち◎ぽ子宮に帰って超心地いい~♥♥」
おっ
メボッ
おギャ

「それに二人の顔を見たまえどう見ても喜んどるだろ♥」
おまんこ
メボッ
メボッ
「子を産んだばかりの母親がしていい…ましてやアイドルがしていい顔じゃないぞ♥」
メボッ
メボッ
ちんぽ
おくち
メボッ
メボッ
「文香…楓さん……」

「まあそうしょげるな君にはそのコたちがいるじゃないか(笑)」
あはッ
メボッ
「そうだよぉ僕たちの愛の結晶なんだからしっかり育ててよね～(笑)」
メボッ
「まあいきなり二人は童貞には荷が重いかもしれんが(笑)」
メボッ
ちっぽ
おくっ
メボッ
「わからないことがあったら他所のPにでも聞いてみろ。この業界アイドルは大体寝取られてるからほとんどのPは子育ての経験があるぞ(笑)」
ボクウ
「は、はい……」
「ぼやぼやしてる暇はないぞ？すぐに二人目を――うっ♥」
「おっ♥ほほ♥射精るぅ♥」

「すぐに二人目を仕込むからな❤さすがにすぐは無理だろうが…」
「ん～❤やはりぱっかり開いた子宮に精液をぶち撒けるのはたまらんな❤」
ブチュウウウッ
ドゼュゼュッ
「あ～最高ぉ～❤出産してまっさらにリセットされた子宮初汚し～❤処女ま○こレイプしたときよりイイ❤」
ズブッ
ボボボボ
ブゼッ
『……』
ゼュゼュッ
「薬を使って無理矢理排卵させれば来月にはいけるだろ❤」
「あ、もちろん楓もね❤」

「なあに安心しろ
アイドル業務の方は
その半年に詰め込んで
不眠不休で働かせるから。
金も大事だからな(笑)」
ぶちゅうぅぅぅ
ぶちゅうぅぅぅ
ドッ
ゼュゼュ
「ほれこのコたちも
こう言っとること
だし❤
まあ腹が完全に引っ込ん
でいる期間は…そうだな、
半年あれば
思っていてくれ(笑)」
ポポポポ
ゼュゼュ
「え……」
ゼュゼュ
ぶちゅぅぅぅ
「引退した楓はお家で
ゆっくりしてようね~❤
ハメ撮り動画売れば
金にも困らないし(笑)」

ぶぢゅうぅぅぅぅ
ぶぢゅうぅぅぅぅ
ぶぢゅうぅぅぅぅ

ぶぇへぇぇぇ
ブチュゥゥゥゥ
ドゼュゥゥ
「それじゃあこれからもよろしく頼むよプロデューサー(笑)」
ゴポポポポ
ブゼッ
ゼュゼュゼュ
ぶたりぶぶぶ
『……はい…』

ぅぇへへぇぇ
ぶぢゅぅぅぅぅぅ
ボッ
ドゼュゼュゼュ
ゴポポポポポ
ブセッ
ゼュゼュゼュ
ぶたぶたぶた

その後彼女たちがどうなったのか…
それは誰にもわからない。

きっと男たちの言う通り――
二人は妊娠できなくなるか
飽きられるまで孕み続け、
プロデューサーは
言われるがまま産まれた子
を育てていくのだろう。

洗脳催眠には誰も
逆うことはできないのだから…

おしまい❤